真紅の王冠

恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真紅の王冠

【Ｎコード】
Ｎ８２８３Ｖ

【作者名】
恵子

【あらすじ】
リート国の最下層の階級である３級兵士に生まれたユージは１６歳。同じ年の王女リディアとひそかに会うような仲になっていたが…

1話　別離

ユージは自分の部屋の窓から見える王宮を見ていた。
打ち上げ花火が何本もあがる。きらきらと光り、落ちて消えていく。
今日は、アイカ国王女リディアの１６歳の誕生日だった。
祝いの花火があがるたびに、ユージの心の中は沈んでいった。
今頃、リディアはきらびやかな宮殿で、楽しく過ごしているんだろうな…
今年は、隣国から数名の王族の王子が招待されていると聞いていた。おそらく、リディアの将来の夫となり、この国の王となる候補者なのだろう。ユージの頭に、リディアが立派な衣装を身につけた凛々しい他国の王子と、愛らしい笑顔を振りまきながら話す姿が浮かんだ。そして、ふと自分の薄汚れボロボロの服装を見やる。
ユージはため息をついた。
どうして、俺は3級兵士にしかすぎないのだろう…
いつかこの日が来るとは思っていた。それが少しでも先になればいいと思っていた。けれども、その日は目の前にやってきたのだとユージは悟った。

王女リディアの誕生日から1週間たった夜、ユージは家をひそかに抜け出し、王宮の隣にある森へ向かっていた。満月がユージの行く道を照らす。
その森は王宮の庭園へと続いていた。
森の中に入ると中はかなり深く、ほとんど何も見えなくなる。だが、ユージは迷わず先へと進む。小さいころ庭園を探検して回った経験のあるユージには、自分の庭も同然だっだ。
暗闇の中にかすかに人の姿が見えた。警備兵だ。
ユージは、すっと身をかがめると、草むらへ入りそのまま四つん

這いになって進む。やがて、草むらが終わりユージはその中から用心深くあたりを見渡す。誰もいないのを確認すると立ち上がり、手足についた泥をはたいた。そして再び立って歩き出す。
森が終わり庭園が見えてきた。そこには立派な東屋がうっすらと見える。ユージはその東屋に向かってどんどん歩く。東屋にかなり近づいた時、一人の少女が立ち上がった。月明かりに照らされた彼女のうれしそうな顔が見える。ユージは彼女のそばに立つと、ひざを少し落とす。そして、彼女の手をとり甲にキスをした。
「誕生日おめでとう。リディア。」
「ありがとう。」
リディアがくったくのない笑顔を見せた。
「この間の誕生日、ものすごく盛大だったね。家からも花火がいくつも見えたよ。」
ユージは硬い表情だった。リディアはそんなユージの表情に気がつかず無邪気に答える。
「そうなの。ホント、父上ったら大袈裟なんだから。」
「隣国の王子も何人か来ていたと噂に聞いたけど」
「ええ。みんな、自分の自慢話ばかり。退屈だったわ。だから、気分がすぐれないと嘘をついて、途中で退席しちゃったの。」
リディアは、ペロリと舌を出して笑った。王女であるリディアがこんな事をするのは自分にだけだった。ユージの表情が思わず緩む。
「今年は本当につまらない誕生日だったわ。今日が早くこないかな、ってそれだけ考えてた。」
ユージはリディアが誕生日パーティを楽しんでいた訳ではなかったことに安堵した。そして、はっとする。
…いけない、ここままリディアと話を続けていては決心が鈍ってしまう…
そう思った瞬間、リディアが言った。
「誕生日プレゼント、くれないの？」
リディアが、目を閉じ左の頬を少し前に差出していた。

お金のないユージは、リディアの頬にキスをすることが、恒例のプレゼントとなっていた。ユージはためらいながらリディアに顔を近づける。いつものように頬にキスをするつもりだった。だが、気がついたら、そっとリディアの口にキスをしていた。

リディアは驚いた顔をしてユージを見る。

「…ご、ごめん。」

リディアは首を振ると、ユージに抱きつきキスを返してきた。

ユージはもう自分を押さえることができなかった。自分もリディアの背中に手をまわし、夢中でキスをした。

どれくらいそうしていただろうか。キスをやめ、お互いの顔をみつめた。

リディアが幸せそうな顔でユージの胸に顔をうずめる。

「ユージ。愛してるわ…」

ユージはあまりの嬉しさに泣きそうになった。そして、リディアを再び優しく抱きしめる。

「…リディア…俺も愛している…君が小さい頃からずっと。」

リディアが笑顔で顔をあげた。ユージの胸に激痛が走る。

…ダメだ。これ以上はダメだ。

ユージはゆっくりリディアから離れた。

「…だから…もう二度と会わない。…今日が最後だ。俺のことは…もう忘れてくれ。」

リディアは目を大きく見開く。

「どうして？イヤよ！」

リディアの目にみるみるうちに涙が溜まっていく。

ユージはリディアと会っている時とても幸せだった。だが、その幸せと同じくらい苦しさも常に感じていた。自分とリディアは絶対一緒にはなれない。このままでいられるはずがない。ずっとずっと悩んできた。なのに、そのことをリディアは考えていなかったとい

うのか？そうでなければ、どうしてなどと言うものか。
…しょせん、リディアは王女なんだ。俺のこの苦しみを理解することもなく、俺に愛をささやき、そして、それがさらに俺を苦しめることすら想像できない。
ユージはリディアに対して、急に怒りが込み上げてきた。
「…君だって、わかっているだろう！君はこの国の王女だ！いずれ、夫をもらいこの国の王妃となる！そして、その夫には俺は決してなれない！そうだろう！」
怒りのままにリディアにそう言い放った。
「でも…私が愛しているのは、ユージだわ。」
リディアは、涙を流しながら、かすれた声で言った。
ユージはリディアから目をそらした。
「…そのことはうれしい。でも、どうにもならない…。どうか、お幸せに…」
リディアにきびすを返し走ってその場から去った。
「ユージ！待って！」
リディアが泣きながら追いかけてくるのがわかった。だが、ユージはそのまま走り続ける。するとリディアの悲鳴が聞こえた。思わずユージは立ち止まって振り返った。リディアが何かに躓いたのか倒れていた。リディアが倒れたままユージを見上げて右手を伸ばす。
「…ユージいかないで！」
ユージは駆け寄って助け起こし、もう一度リディアを抱きしめ、そのままどこかへさらってしまいたい、そんな衝動にかられる。
…無理だな。どうやって彼女を養うんだ。
こぶしを握りしめ、その気持ちをぐっとこらえた。そして、前に向き直り森の中へと再び走り始めた。
リディアは倒れたまま、走り去るユージを見ているしかできなかった。ユージの姿が見えなくなると、そのまま地面に伏せってリディアは大声を出して一人で泣いた。

2話　拘束

その頃、宮殿ではベッドにも部屋にもいないリディアに、大騒ぎになっていた。
リディアは普段なら、誰にも見つからないように最新の注意をはらって部屋に戻るのだが、この日は泣いてひどい顔のまま、ふらふらと部屋に向かった。宮殿の騒ぎにすら気がつかなかった。
部屋に入ろうとしたとき、誰かが自分を呼びとめた。
「リディア！！！」
その声の方をリディアは見た。父サルトだった。その後ろには女中たちと、父の側近がいる。リディアはしまった！と思ったが、もう遅かった。サルトがものすごい形相でリディアに近づいてくる。
「どこへ行っていた！」
「…」
普段なら、うまく機転をきかすことができたかもしれない。だが、ユージとの別れ、そして、父の剣幕を前に、リディアは何も言う事が出来なかった。
「その泥はなんだ…」
そう言われて、あわてて自分の服を見た。泥だらけだった。倒れたときについたのだと、このときはじめて気がついた。王宮で泥がつくような場所は限られている。すぐにサルトはリディアがどこへ行っていたかを悟った。
「…お前、庭園へ行っていたな。」
リディアは何も言えず下を向く。
「…一人であんなところへ行くまい。誰と会っていた？」
リディアは下を向いて黙ったままだった。
「…もしや、あの3級兵士の息子ではあるまいな！」
はっとしてサルトを見上げる。
「そうなんだな？」

リディアは違うと叫ぼうとしたが声が出なかった。
「今日だけではあるまい！私が禁じてからも、ずっと会っていたのだな！」
これほど怖い父を見たのは初めてだった。
「至急、３級兵士のユーマの息子、ユージを探し出せ。」
サルトが側近に向かって命令する。側近がお辞儀をして立ち去ろうとした。
「ち、父上！私たちは、さきほど、二度と会わないと約束し、別れてまいりました！ですから、どうか、どうかユージをお許しください！」
サルトが、ゆっくり振り向く。
「…やはり、あの者と会っていたのだな。」
サルトは、冷たく低い声で答えた。リディアは再びしまったと思った。父の誘導にひっかかって、ユージと会っていたと自分から言ってしまった。
「あの者には、以前、お前には会うなと厳しく命じたはずだ。それを承知で会っていたというなら、不敬罪と取られても仕方あるまい。見つけたら、牢屋に放り込んでおけ！」
不敬罪。それはこの国では死刑を意味した。
「父上！本当にもう二度と会いませぬ！ですから、どうかお許しを！」
「一度約束を破ったものの言うことが信用できるはずがなかろう！リディアを着替えさせたら、すぐに寝かせよ。部屋から出ぬよう見張りもつけるように。」
そう女中と側近に告げると、サルトはその場を立ち去った。

ユージは森を抜けた後、家に帰る気にもなれず、目的もなくあたりを歩いていた。
ユージはリディアが自分をどう思っているか、ずっと知りたいと思っていた。しかし、知ったところで何も変わりはしない。だから、

知らないほうがいいのだ、と自分に言い聞かせていた。
だが、今日、ユージはリディアの気持ちを知ってしまった。リディアが自分を愛していると言ってくれたとき、どれだけうれしかったか。
ユージも男だ。何度もリディアを抱く夢を見た。夢は夢だ。何も残らない。しかし、現実は違った。忘れようとしても、リディアを抱きしめた感触が体から消えない。リディアがすぐそばにいるような、そんな錯覚さえした。それがよけいにユージを苦しめた。
ユージは今日、庭園に行ったことを後悔した。二度と会わないと覚悟したのなら、行かなければよかったのだ。

深夜の2時をまわったころ、ようやくユージは家へ向かった。家の近くまで来た時、あたりが騒がしいのに気がついた。家の前に何人かの人がいる。近衛隊だった。かかがり火を持って家の前に立っていた。近所の人が家の様子をこっそりと見ている。玄関の扉の前では、母が父に抱きついて泣いていた。
その光景を見たとき、ユージには何が起こったのかを悟った。
ユージは、しばらく立ち止まってその様子を見ていたが、やがて覚悟を決めてゆっくり家へ向かう。
近衛隊がユージに気がついた。
「3級兵士のユーマの息子、ユージだな。」
「…はい。」
ユージは冷静にそう答えた。
「王族に不敬の罪を働いたとして、お前を逮捕する。」
近衛隊がユージの手首を縄で縛った。ユージは抵抗せず、近衛隊のなすがままに従った。
母のキリーが泣きながら父ユーマとともにユージのところへやってきた。
「ユージ！お前…不敬罪だなんて…本当なのかい？」
「…父さん。母さん。すみません。今まで育ててくれてありがとう

ございました。親不孝なこの息子のことは、もう忘れてください。」
キリーは泣き崩れた。
…母さん。ごめん。
ユージは馬に乗せられると、近衛隊もみな馬にまたがった。
5歳下の弟のタツが泣きながらそばにやってきた。
「兄さん！！！」
「タツ。ごめんな。これからはお前が父さんと母さんを守っていくんだ。頼んだぞ。」
ユージはタツに笑顔を見せる。
「イヤだ！兄さん！行かないで！」
ユージを連れて近衛隊が出発した。タツが追いかけようとしたが、兵の一人に制される。
キリーとユーマとタツは泣きながら家の前に立ちつくし、いつまでもユージを見ていた。

やがて、王宮へ到着するとユージは地下の牢屋へ入れられた。
「明日の朝一番で処刑される。それまでここで待機せよ。」
近衛隊が牢屋からさっていった。ユージは寝転がって、ぼんやりと天井を見る。
小さい頃リディアと何も考えずに、遊びまわった日々が思い出された。宝石のように光り輝いていた。
…どうして、あのままでいられなかったんだろう。
ユージの目から涙がこぼれる。
ユージはリディアとの身分の違いに気がついてから、ずっとずっと苦しかった。自分が他の女性を愛せるとは思えなかった。リディアのような女の子が他にいるはずがない。一生彼女を愛し続け、その苦しみを持ち続けるのだ。死ねばその苦しみから永久に開放される。
…俺はもう楽になりたい。
リディアや両親やタツが悲しむのだけが唯一の心残りだったが、

ユージは静かにその時を待った。

3話　追放

「さきほど、あの者が捕まり、牢屋に入れられたという知らせを受けました。」
　王の側近であるスオウが、サルトの寝室に報告に来ていた。
「そうか。で、どんな様子だ？」
「何も抵抗せずおとなしく従ったそうです。牢屋でも静かにしているとのことです。」
「…リディアはどうしている？もう寝たのか？」
「それが…ベッドに座ったまま動かれないと…」
　サルトはリディアが気になり、リディアの部屋へ向かった。中に入るとリディアはベッドに腰かけ無表情に前を見ながらただ静かに泣いていた。
「あの者が、牢屋に入れられたそうだ。」
　リディアは、ぴくりとも動かなかった。
「あの者は捕えられた時、何も抵抗しなかったそうだ。見つかれば自分には死が待っていると分かっていたようだな。お前は、そこまで考えていたのか？会っているということが見つかれば、自分があの者を死においやると。そして、あの者の家族や友人を悲しませることになると。」
　父の話を聞いて、リディアはふと時々ユージが見せた暗い表情を思い出した。
「さあ、もう寝なさい。あの者は明日の朝、処刑する。もう忘れるのだ。」
　リディアはそのまま動かなかった。サルトはため息をついた。
「…あの者はお前のために、命をかけた。お前はどうなのだ？あの者のために何でもするか？それを受け入れるのなら、命だけは助けてやってもよい。」
　リディアはようやく父の顔を見た。

「先日の誕生会に来ていた王子の中から一人選び、結婚すると約束するなら、国外追放にしてやろう。」
「…父上のおっしゃる事は信用できませぬ。国外追放と偽って、人気のないところに連れ出し、殺すおつもりなのでしょう…。」
娘に自分の考えを言い当てられ、サルトは少したじろいだ。
「…国境まで私が指名する者に見送らせ、その者達に、無事見送ったことを、私に直接報告をさせるのなら…承知いたします。」
リディアの要求はサルトを驚かせた。
…リディアにこのような知恵が働くとは。確かに自分の信用のおける者を護衛につかせれば国境まで無事に行けるだろう。国境を出れば手出しはできない。
サルトは娘の思わぬ要求に応じる気になった。
「誰を指名するのだ。」
「1級兵士のイアン、デミー、それとダレンです。」
サルトはドアの外にいる側近のスオウに声をかけた。
「今の話を聞いていたか。」
「はい。」
「明日の朝一番に、その3名に通達を出し、用意ができしだい出発させろ。ユージには十分な旅支度を与るように。」
「承知いたしました。」
スオウがその場を離れた。
「…これでよいか。」
「はい。」
「では、もう寝るのだ。」
リディアは静かに布団の中に入る。その姿にサルトは一安心し、部屋をさろうとした。すると、リディアが小さな声で言った。
「父上…ありがとうございます…。」
サルトは娘の言葉に驚いた。
…愛してもいない男と結婚されられるというのに、その父にありがとうと言うのか。あの者が生きていることが、そんなにうれしいと

いうのか。それほどあの者を愛していたのか。…だが、リディアはまだ１６歳だ。きっとすぐにあのような下級兵士の事などすぐに忘れるだろう。
サルトは何も言わずそのまま部屋を立ち去った。

ユージは一睡もせず朝を迎えた。
誰かがやってくる気配に気が付き体を起こした。近衛隊だった。彼らが牢屋の扉を開けユージに出るように促す。ユージは牢屋から出た。そのまま彼らに連れられ、王宮の中を歩く。あたりはまだ薄暗く誰も人はいなかった。やがて、王宮の裏門に辿り着く。
そこには荷物が積まれた馬４頭と、近衛隊、自分と同じ年くらいの兵士らしき若者３名が立っていた。その３名の姿をよく見てユージは驚いた。イアン、デミー、それにダレンだ。
…どうして彼らがここにいるのだ？まさか、彼らが俺の処刑人なのか？

ユージは１０歳で兵士訓練学校へ入れられた。イアン、デミー、ダレンの３人はその時の仲間だ。その年の新入生で１０歳だったのは４人だけだった。そのせいかすぐに４人は仲良くなった。彼らは１級兵士訓練生だったが、階級関係なくユージに接してくれた。ユージはそれがとてもうれしかった。学校を卒業してからは、時々会う程度だったが、ユージにとって一番大事な友人たちだった。
近衛隊の一人が、紙を広げ読み始める。
「３級兵士のユーマの息子ユージ。本日をもってお前は国外追放の身となった。すみやかにこの国から退去せよ。３日が過ぎてもこの国にいた場合は処刑される。国境までは、１級兵士のイアン、デミー、ダレンを見張りとしてつけることとする。」
…国外追放だって？
近衛隊は続いてイアン、デミー、ダレンの３人に向かって告げる。
「３級兵士のユーマの息子、ユージを国境まで送りとどけ、国から

離れるのを見届けた後、早急に王宮へ戻り、リディア殿下へその旨直接報告せよ。」
ユージは思わず涙が出そうになった。
…あんな風に置き去りにしていったというのに、それでも俺を助けてくれるのか…
イアン、デミー、ダレンが近衛隊に敬礼をし、馬にまたがった。ユージは手首を縛られていたため、一人では馬に乗れず、近衛隊に手伝われて乗る。
「では出発せよ。」
イアンが先頭に立ち、ユージ、ダレン、デミーの順で王宮の裏門を出る。
しばらくすると、イアンが振り向いた。
「ユージ、一体何があったんだ？朝、突然起こされ、王宮に来るように言われて来てみればこれだ。お前が国外追放だなんて…一体何をしたんだ？」
ユージは何も言わなかった。いや、何も言えなかったのだ。一言でも声を発したら、大声で叫んで泣いてしまいそうだった。
「…このままいくと北に行く事になるけどいいのか？」
ユージが黙ってうつむいているだけだったので、イアンはため息をつくと、前に向き直る。そして、そのまま４人とも無言で北へ進んだ。
１時間もすると、はずれの丘にやってきた。
ユージは後ろを振り返る。王宮が遠くに小さく見えた。そして、さらに遠くなる。風が吹き、ユージの黒い髪を頬をなぜていく。それが、ユージにはリディアから別れの言葉のように感じた。
しばらくすると、ユージは、前に向き直りそのまま二度と振り返ることはなかった。

4話　旅立ち

４人は昼ごろ、昼食をとるために休憩を取った以外は、ひたすら無言で国境へ向かった。夕方には、もう少しで国境に出るところまでたどり着き、イアンが馬を止める。

「このあたりで一泊しよう。」

３人が馬から降り、ユージを馬から下ろす。そして、馬を近くの木につなぐと、黙々と野営の準備に取り掛かった。ユージはその場に立って、ただ彼らを無表情に見ていた。集められた枝に火がつく。

すっかりあたりが暗くなった頃、食事の用意ができ、ユージは彼らに呼ばれ火のそばの用意された席に座った。さきほどデミーが捕まえたウサギ４匹が棒にくくりつけられ、ちょうどよい具合に焼けている。なんともいえないよい匂いと、おいしそうに焼ける音がした。ダレンがユージの縄をナイフで切る。そして、パンと水を差し出す。ユージは自分の手首をゆっくりとさすった後、それを受け取り、無言で食べ始めた。３人はそんなユージにため息をつくと、火見ながらを黙ってパンを食べ始めた。

「…俺が小さい頃、母さんと一緒によく王宮の庭園に行っていたって事は話したよな。」

ユージが突然話始めたので、３人は驚いてユージを見た。じっと火を見つめているだけだった。

「王宮の庭園ってさ、広くて、冬以外はいつも花がいっぱいで、いいにおいがして、俺は大好きだった。毎日探検して遊んでた。」

ユージはパンを一口ほおばり、飲み込んだ。

「…俺さ、そこで、いつもリディア姫と内緒で遊んでたんだ。毎日のように。…リディア姫さ、いつも女中の目をしのんではよく庭にやってこられててさ…１０歳の時、それが見つかって、会うのを禁じられた。まぁ、当然だな。かたや王女様、かたや庭師と３級兵士の息子。リート国では息子は父のあとを継ぐんだから、その息子も

３級兵士にしかなれない。たとえ友達だとしても、どう考えても、釣り合わないよな。」
　ユージ大きなため息をつく。
「…そして俺は無理やり、１０歳で兵士訓練学校に入れられた。３級兵士の息子が１０歳で学校に入ることはまずない。たいてい１２歳から１４歳だ。お前らも、どうして１０歳で入学したのか不思議がっていたよな。お前らと一緒にいたおかげで、３級兵士訓練生のトップをとれたし、誰もが俺が優秀だから１０歳で入学したのだと思ってくれた。…けど、本当の理由はそういうことだ。」
　そういうと、ユージはしばらく黙ったまま火を見つめた。焚き火がパチパチと音を立て、４人の顔をゆらゆらと照らす。遠くで犬の遠吠えが聞こえた。
「…学校にはいって半年もたったある日の満月の夜、母さんから一通の手紙をもらったんだ。」
「手紙？」
　イアンだ。
「そう。手紙だ。…リディアからだった。」
　３人は、ユージが王女のことをリディアと呼び捨てで呼んだことに驚いて目を見開く。
「母は殿下に泣いて頼まれたと。だから内緒だよ。これっきりだからね。と言った。俺はすぐ自分の部屋に行って、手紙を読んだ。そこには、こう書かれていた。」

ユージどうしてますか？会いたいです。今日の夜１０時に庭園の東屋でまってます。誰にも内緒で来て下さい。

「俺は単純に喜んだ。俺もリディアに会いたかった。夜になるとこっそり家を出て王宮の庭園に向かった。小さい時から庭園で遊んでいた俺には、忍び込むことくらい朝飯前だった。俺達二人は久し振りの再会を喜びあった。…それ以来、満月の日に隠れて会っていた

んだ。」
ダレンは思わず言った。
「それで見つかったのか…。」
「二人でいるところを見られてはいない。」
今度はデミーが訪ねた。
「では、どうしてバレたんだ?」
「ウサギ、こげそうだぞ。」
ユージがウサギを手に取った。3人はあわててウサギを取る。ユージがウサギを食べ始めたので、3人も食べ始めた。
「…昨日…いつものようにリディアと会ってたんだ。リディアに誕生日のお祝いを言って…」
ひと呼吸を置いてユージは言った。
「俺たちはキスをし、抱きしめあった。」
3人は驚いて、ウサギを食べるのをやめた。そこまで二人が親密な仲だとは思っていなかったからだ。
「その直後、俺はリディアに別れを告げた。昨日行く前からそのつもりだった。もう限界だと思っていたからな…そしてその場から去った。リディアは泣きながら俺を追いかけてきた。そして転んで倒れてながらも俺の名前を呼んでた。そんなリディアを俺は置き去りにした…たぶん、その後、部屋に戻る時に見つかったんだと思う。森は前日の雨でぬれたままだった。転んだ時に服に泥もついたんだろう。だから、リディアはサルト様に言い逃れができなかったんだと思う。…俺が家に戻ると近衛隊が待っていた。…そして、俺は不敬罪で捕まった。」
「不敬罪だと?」
3人は大声で同時に言った。
「そうだ。確かに、そう言われた。牢屋に入れられる時、今日の朝一番で処刑されるとも言われた。」
「ではどうして、国外追放に変わったんだ?」
イアンが言った。

「たぶん、リディアが…サルト様と取引をしたんだ。…俺の命と引き換えに、他国の王子と結婚することを承知したんだろう…リディアはお前たちが俺の親友だと知っていたからな。だから、お前たちを俺の護衛につけさせたんだ。サルト様が俺を人知れず殺してしまわないように。」

３人は何も言えなかった。いや、本当は、ユージに何か言いたかったが言葉が見つからなかった。

「俺はどうして３級兵士なんだろう、なんて不幸なんだろう、と長い間思っていた。けれども、これほどリディアを愛し、これほどリディアに愛された俺は、やっぱり幸せだったんだな…」

ユージはうさぎを食べ終ったのか、骨のついた棒をぽいっと、焚き火の中に投げ入れた。

「俺、昨日寝てないんだ。明日の朝も早いんだろう？もう、寝るよ。」

ユージは荷物から寝袋を取り出し、その中にもぐる。

「俺たちは交代で番をしてるから、安心して寝てろ。」

「うん。ありがとう。イアン。」

ユージはそう言うと目を閉じた。疲労こんぱいだったがユージはなかなか眠れなかった。３人も交代で横になったが、朝がくれば二度とユージとは会えないのだと思うと、ほとんど眠れなかった。

あたりが明るくなると彼らは起きて、朝食を食べた。日が昇る前には出発して国境へ向う。その間、彼らは、兵士訓練学校の時の思い出話をした。ずっとこうして話していたかったが、楽しい時間はあっという間にすぎてしまう。２時間ほどもすると国境へ着いた。

ユージは荷物の中から、剣を取り出し腰にやり、弓矢を左肩に背負った。

「３人とも、本当にありがとう。最後に会って話せてうれしかった。父さんも母さんもたぶん何も知らされていないだろうから、俺が国外追放に変わったと伝えて欲しい。」

「分かった。」
イアンが返事する。
「それから…リディアにもありがとうと、そして、君に助けてもらった命は大事にすると伝えてくれ。」
イアンはうなずいた。
「…お前、大丈夫か？」
これから先のユージの身の上を心配し、デミーが聞いた。
「大丈夫さ。俺は、ウサギを射るのに、昨日のお前みたいにあんなに手間取らないからな。」
すると4人は大笑いした。ユージは弓矢の達人だったから、もしユージがウサギを狩っていたら一瞬で片付いていたに違いなかったからだ。
ユージは、もう一度3人を順番にじっくり見た。
「…じゃあ、俺行くよ。みんな元気で！」
ユージは笑って元気に手を振ると、馬に乗り北へ向かって走っていった。
イアン、ダレン、デミーの3人はその姿が見えなくなり、馬が出す砂煙も見えなくなるまで、ユージを見送った。

5話　出会い

３人は帰りはほとんど休みをとらず、無言で馬を駆けひたすら走った。それでも、王宮へ戻った時には、夜中の１１時を過ぎていた。王宮の宮殿につくと、一人の痩せた男が彼らを出迎えた。

「１級兵士イアン、ダレン、デミーか。３人ともご苦労だった。私は王の側近のスオウだ。リディア殿下がお前たちの帰りを首を長くしてまっておられる。今から案内する。」

３人はスオウの後ろについて、宮殿の中を進んだ。信じられないくらい広く、きれいで豪華だった。あまり豪華さに３人は圧倒されながら歩いていった。しばらくすると、スオウが立ち止まる。

「こちらの部屋にて殿下がお待ちだ。」

スオウが部屋の扉をあけ、３人に中に入るように促す。３人は緊張して部屋の中へはいった。扉が閉められる。

奥に自分たちと変わらない年の長い金髪をした美しい女性がいた。目の覚めるような綺麗な青いドレスを着ている。リート国でもっとも高い薬の葉でそめられた服だ。それは、その女性が王族である証拠だった。

３人はその女性の前へ進み、手前で膝をつけ頭を下げた。

「イアン、ダレン、デミーですね。リディアです。」

「１級兵士、イアンと申します。左がダレン、右がデミーです。」

「３人ともどうか顔をおあげください。」

３人はリディアを見あげる。リディアが順番に彼らをじっとみる。

「…ユージは無事に国外へ行くことができたのですね。」

「はい。無事、北の山へ向かって去って行くのを見届けました。」

イアンが答えた。

「３人とも御苦労さまでした。さぞかしお疲れでしょう。明日から３日間の有給を与えます。隊長にはすでに連絡しております。さあ、早く自宅に戻ってゆっくり休みなさい。」

「あの…」
「何でしょう？イアン。」
「…ユージが、殿下にありがとうございます、と。そして、殿下に助けてもらった命は大事にすると、そう伝えてくれと…。」
リディアは、驚いた顔を見せた。
「…どうやって彼は、私が彼を助けたと知ったのでしょう…」
「いえ…知ったのではなく…殿下が自分を救うために…その…政略結婚をうけたのではないかと…そして、我々を見張りにつけたのは、王から自分を守るためではないかと…そう推測していました。」
リディアはさらに驚いた。
…他の人と結婚するのに、ありがとうと言ってくれるの？
目に涙が溜まる。
「…私は彼を不幸にすることしかできませんでした…」
「いえ。それは違います！あいつは、…いえ、ユージは殿下を愛し、殿下に愛された自分は幸せだったと言っておりました！」
イアンが声を張って言った。
その途端、リディアの目から後から後から涙があふれ頬を伝っていく。
「…彼がそう思っていたことを知ることが出来てよかった…イアン、ダレン、デミー、本当にありがとう…もう、お帰りなさい。」
3人はリディアにそろって頭を下げると扉へ向かった。扉のノブにイアンが手をかけた時、リディアが言う。
「その扉を開けてこの部屋を出たら、この2日間に見聞きしたことはすべて忘れるのです。いいですか。」
「はい。」
3人は部屋を出た。そこにはスオウが怖い顔をして立っていた。
3人は来た時と同じようにスオウの後ろについて歩き、宮殿から出る。さっき乗ってきた馬とは違う馬がそこに待機していた。
「馬がかなり疲れていたようだったので、新しい馬に代えておいた。後日、馬を取りに来るがいい。」

スオウがそれぞれ3人に小袋を手渡す。中を見なくても何かがわかった。金だ。重さからするとかなりの金額だ。
「これは殿下からの特別の謝礼だ。ありがたく頂戴するように。」
3人はそれを懐に入れ荷物を背負い、馬にまたがった。すると、スオウが声をひそめ、するどい口調でこう言った。
「殿下が最後に言われたこと、命が惜しくば必ず守るように。」
3人は心臓が凍りついた。
…この金は口止め料だったのか！
3人はただ頷いた。スオウはそれを見ると、すぐに建物へはいって行った。3人は静かに馬をけった。馬が歩き出した。王宮を抜け、森の横の道を行く。3人は森を眺めた。その奥にある庭園で楽しそうに過ごす二人の姿が思い浮かんだ。
3人はどうすることもしてやれなかった自分たちの力のなさに、歯がゆくて仕方がなかった。

ユージは遠くに雪をかぶった美しい山々を目指していた。あの山の麓にはアイカ国があった。アイカ国はこのあたりでもっとも大きな領有地を持ち、歴史も古く、絶大な力を保つ国として知られていた。
途中、荒野の真ん中で野宿し、次の日もひたすら北をユージは目指す。
日がふたたび傾きだしたころ、そろそろ、野宿をする場所を見つけなければ、とユージは思う。小さな森を越えると川が流れていた。ユージは水筒を取り出し水を入れ、その水を飲む。雪解け水なんだろうか。とても冷くておいしかった。馬も水をおいしそうに飲んでいた。
「…？」
ユージは何か聞こえたような気がして、あたりを注意深く見渡す。
また、聞こえた。はっとした。悲鳴だ。
ユージはあわてて水筒をしまい、馬にまたがると声がした上流へ

向かった。すぐに何人かの男たちが対岸で騒いでいるのが見えた。男たちの向こうには熊がいる。かなり巨大な熊だ。一人が血を流して倒れていた。

ユージは川の様子をじっくりと観察する。

…川幅は広いが、それほど深くはなさそうだ。

ユージは急いで川を渡るとすぐさま馬から下り、馬を木にくくりつけ、荷物からある容器を取り出す。蓋をあけ3本の矢を手に取り、容器の中の液体にその先端をつける。いったん、矢を地面に置くと蓋を閉め、急いで容器を荷物にしまい、再び矢を手にする。

そして、弓を構えながら、熊に向かって走る。

「伏せろ!」

ユージは大声で叫んだ。男たちがユージの声に振り向いた。ユージは弓を大きく引いた。その姿を見て男たちはすぐに身をかがめた。ユージは矢を放った。矢がまっすぐに熊の胸にささる。痛みはなかったようで反応はなかったが、熊がユージに気がついた。ユージに突進してくる。ユージはものすごいスピードで2本の矢を続けて熊に放つ。二つの矢が熊の両目に刺さる。熊は立ち上がり叫び声をあげた。そしてそのまま苦しそうしていたが、やがてその場に倒れ、動かなくなった。

男たちは、あっという間の出来事に呆然としていた。が、怪我人のうめき声に気が付き、すぐ手当を始めた。ユージは熊に近づくと矢を抜いた。そして川でその先を洗い、矢を数回振って水を飛ばすと、矢を筒に戻した。男たちのそばへ近づき様子を見た。よくみると男たちはユージと同じ年くらいの少年ばかりだった。一人がユージに気がついて立ち上がった。

「どうもありがとうございました。」

そういって頭を下げた金髪の少年も腕に傷を負っていた。

「何名の方がやられたのですか?大丈夫でしょうか。」

「1名です。かなり重症です…すぐに帰りきちんとした治療を受けなければなりません。」

応急手当をしている様子を見てユージは言った。
「傷薬と痛みどめを持っております。お分けしましょう。」
金髪の少年は怪我した少年の様子を見てしばらく考えていた。
「…ぜひ、お譲りいただきたい。」
ユージは駆け足で馬に戻り荷物から薬を取り出し、金髪の少年の所へ戻った。
「この粉末を傷口にふりかけください。こちらが痛み止めです。30分ほどで効いてきます。」
「ありがとうございます。」
金髪の少年は紙に包まれた薬を受け取ると、すぐに怪我人を治療している少年に渡した。彼がユージの薬をふりかけ包帯を巻き、怪我人が痛み止めを飲むのを確かめてから金髪の少年は言った。
「…あの熊は死んだのですか？」
「いえ。死んではおりません。私の放った矢の先にしびれ薬をしこんでいましたので、体中がしびれて動けないだけです。すぐに動けるようになり、目を射たれた痛みで暴れまわるでしょうから、すぐにこの場を放れた方がいいでしょう。…殺してやった方がいいのかもしれませんが、私のこの剣ではそれは無理ですから。」
それは彼らが持っていた剣もだった。
「…あなたは、どこかに向かわれる途中ですか？」
ユージは首を横に振った。
「この辺りで野宿できる場所を探していたところです。私のことはもう結構ですから、はやく彼を連れて帰ってあげてください。」
そういうとユージは馬の所へ戻ろうとした。
「助けてくださったお礼がしたい！ここから馬で2時間ほどかかりますが、ぜひ、私どもと一緒にお越しください。一晩の寝床と食事を用意しましょう。」
ユージはどうしたものかと思った。
体はかなり疲れている。この3日間、ほとんど寝ていないのだから当たりまえだ。さすがに今日は熟睡してしまいそうだ。寝ている

ところを熊に襲われたひとたまりもない。彼らはみたところアイカ国の者らしい。彼らと一緒に行きアイカ国の様子を見るのもいいかもしれない…

「それは大変ありがたい。ご一緒させていただきます。」

二人がやりとりをしている間に、怪我人の治療は終わり、みなそれぞれ馬にのりすぐ出発できる体制になっていた。

「では、ついて来てください。」

金髪の少年が馬にまたがると、すぐ彼らは歩き始めた。ユージもすぐに馬に乗り彼らにつづく。金髪の少年が一番後ろにいたので、その隣にユージはついた。すると金髪の少年が言った。

「私はカイといいます。」

「私はユージです。あなたのお怪我は大丈夫なのですか？」

「ああ、私は熊から逃げようとしてこけたときに腕をすりむいただけですから。他の怪我をしてるヤツも同じですよ。ですので大丈夫です。」

「あなた方はアイカ国の方ですか？国境はもう超えているのですか？…すみません。私は今日このあたりにきたもので、何もわかっていません。」

「そうです。我々はアイカ国のものです。国境ならさきほどの川がそうでした。あの川からこちら、そしてあの山の頂上までが我々の国です。」

ユージは後ろを振り返り川を見た。そうか、あれが国境だったのか、と思った。

そして、前に向き直り、改めて目の前にそびえたつ山々を見た。山ははるか向こうにあった。

…あの山まで全部がアイカ国のものだというのか。なんて広大な国なんだ。

「私はリート国から来ました。」

…どう自分のことを話せばいいんだろう…

ユージは少し考え込む。

「ちょっといろいろな国を見てみたくなりましてね。アイカ国は豊かな国と聞いていましたので、まずこちらに立ち寄ろうと思ったのです。」
「そうですか。それなら、町でしばらく滞在されるといいですよ。アイカ国のどこへ行くのかゆっくり決められるといいでしょう。」
カイがニコリと笑ったので、ユージも思わず笑顔を返す。
…なんだか、人のよさそうな人と出会ってよかったな。
ユージはほっとしながら、ユージは彼らと共に、その村へと向かった。

6話　ネイルの館

怪我人に気を使ってゆっくり走ったため、彼らの町へは3時間ほどかかり、その頃には、あたりはもう真っ暗になっていた。
　町のはずれは農家が多かったが、中心部に行くにしたがって、きちんとした街並みになっていく。ユージは国境付近の町だから、きっと小さな町に違いないと思っていたのでユージはとても驚いた。リート国では、国境付近にこんなに立派な町はなかったからだ。
…さすが大国アイカ国だな…
　各家庭からの温かな光が漏れる。今まで荒野で野宿してきたユージは、その灯りにほっとした。そのうちに塀が長く続く家があらわれる。
…こんなはずれの町にもえらい身分の人が住んでるんだな…
　やがて、その壁が途切れ大きな門が現れた。門まで来るとカイが、一人に何かを話かける。その青年はカイに黙って頷くと、そのまま道を馬でかけていった。みんなはその門の中へ入ろうとする。
…ここが彼らの家なのか？
　ユージはあまりにも大きすぎる家に一抹の不安を感じた。だが、いまさら逃げるわけにもいかなかった。
　彼らについて門を抜けると、ユージの想像を超える立派な家が目の前に現れる。この町の豪族の家に違いなかった。カイが馬から降りると、ドアを開けて叫んだ。
「フウが熊にやられました！タンカを！」
　すると数名が玄関から出てきた。
「まぁ！！これは大変だわ！はやくタンカを持って来て頂戴！お医者様を呼ばないと！」
　５０歳くらいの女性だった。
「キースに呼びに行かせました。」
　すぐにタンカが用意され、みんなで怪我を負っていた若者を馬か

ら下ろしタンカに乗せると家の中へ運んで行く。カイはそのまま玄関前でその女性と何やら話していた。話が終わると、ユージのところに走ってやってきた。
「馬はひとまずその横にある木にでもくくりつけておいてください。こちらで厩舎に連れて行き面倒を見ておきます。」
ユージは言われたとおりに馬を木にくくりつけると、荷物を下ろそうとした。すると大きな男が一人やってきてユージの荷物をひょい、と持ち上げる。
「あ、どうもすみません。」
カイとその大男がどんどん歩いていくのでユージはその後をただついていくだけだ。
玄関に来ると、さきほどの女性がニコニコしながらユージに話かけてきた。
「この家の主の妻、マーサーです。何やらみなを助けていただいたそうで、ありがとうございます。今主人は出かけておりますの。だいたいの事情はカイから聞きました。客室に今からご案内いたしますね。」
「ユージと申します。突然こんな夜遅くにすみません。」
ユージは緊張して体を硬くしながら深く頭を下げる。
「いえいえ、気になさらないでね。」
「すみません。私はあの重傷の友人についていたいので、こちらで失礼します。」
カイがユージに頭を下げた後、すぐに家の中へはいって行く。
「ユージさんでしたね。さ、ご案内いたしますわ。」
マーサーと大男の後をついて中に入ると、すぐ左に階段があった。その階段を上り2階の手前から二番目の部屋へとおされた。部屋はかなり広く、大きなベッドにテーブル、ソファまでがあった。大男がどさりを部屋の中にある壁の横にある机に置く。
「ずいぶんお汚れですね。ここには自慢の露天風呂がございますのよ。入られます？」

ユージは自分の姿を改めて見てみた。泥だらけだった。
「…そうさせていただきます。」
「でしたら、彼に案内させますわ。」
マーサーは大男をちらりを見る。大男が頷いた。
「新しい服もタオルもご用意いたしますから、そのままどうぞ。」
「あの…服は自分のがありますから。」
「ここにはいろいろなお客様が来られて、その方々にも同じようにしているの。ですから、お気になさらないでくださいな。」
「そうですか…では、お言葉に甘えさせていただきます。」
ユージは弓矢と剣を荷物が置かれた机に置いた。本当は両方とも持っていきたかったが、旅人を装ったように見せるためには、置いていく方がよいと思った。部屋を出るとマーサーとはさきほどの階段を足早に下りて行った。
「風呂はこちらです。」
「あ、は、はい。」
大男が廊下の奥の方へ向かった。ユージはおどおどついていく。廊下の奥には扉があり、そこから外へ出た。すぐにしめった生暖かい風が体をつつむ。よく見ると木々の隙間に風呂が見えた。２０人くらいが入れそうだった。階段を下りていくと風呂のそばに小屋があった。
「そちらが着替え室となっております。お風呂に入っておられる間に、お部屋の方にお食事をご用意しておきます。食べられた後の食器はそのままお部屋に置いておいて結構です。明日の朝取りに伺います。では、ごゆっくりどうぞ。」
大男はそういうと、階段の下にあったドアから家の中へはいっていった。
ユージは小さな小屋に入ると服を脱ぎ温泉へ恐る恐るつかる。温泉は話に聞いていただけで、入るのは初めてだった。体の芯まで温まり、傷ついた自分の心まで癒されるような気がした。空を見上げると、月が見えた。満月から少し欠けた月だ。

…まだ、あれから4日しかたっていないのか…
風呂から上がり、小屋に入るとタオルと真新しい服が知らない間に用意されていた。そこには手紙が添えてあった。
―服はこちらで洗濯をしてからお返しします。―
タオルで体を拭き服を着た。洗いたてでとても気持ちがよかった。
部屋に戻ると、あたたかいパンと暖かなスープ、そして新鮮な果物と、冷たい水が部屋の真ん中の机に置かれていた。ユージが風呂から上がる時間を見計らって用意されていたかのようだった。
ユージは机に近づいて料理を覗き込む。
…うわぁ。スープにこんなにいっぱい肉や野菜が入ってる。
ユージは急にお腹が鳴った。あわてて席につくと、スープを一口飲んだ。あまりの美味さに目を丸くする。その後は、無我夢中であっという間に全部平らげた。全部食べると急に眠たくなってきた。立ち上がって、ベッドにバサッとうつぶせに倒れる。信じられないくらい柔らかかった。ふとんを干した、いいにおいがする。
ユージはこんなもてなしを人から受けたのは初めてだった。なんだか自分がとても身分の高い人間になった気がした。
…リディアも毎日こんな生活なのかな…毎日おいしいものを食べ、こんなふわふわのベッドで眠る…

ユージはふと目を覚ました。とても気持ちがよかった。なんとなくぼうっと部屋の中を見わたす。昨日の夜食べた食事の食器が机の上からなくなっている。
…今、何時なんだろう。
部屋にあった時計を見る。2時だった。ユージは目をむいて飛び起きる。あわてて部屋から出て1階に下りた。うろうろしていると人の気配のする部屋があった。
そっとドアを開けて覗き込む。そこは台所らしかった。4人の女の人が食器を洗ったり、野菜の皮をむいたりしていた。
「あの…すみません…」

すると、一斉にみんなが振り向いた。
「あら、おはよう…じゃ、もうないわね。よほど疲れてらしたのね。」
マーサーがクスクス笑いながら言った。
「はぁ…そうみたいです。どうもすみませんでした。」
ユージは恥ずかしくて、頭を下げて言った。
「ふふ。お腹すいているわよね？すぐにお昼ごはんを用意するわ。」
「はい。こんな時間に本当にすみません。」
「隣の部屋が食堂ですの。そちらにすぐお持ちしますわ。」
「あ、はい。」
ユージは隣の部屋へ行った。とても広い部屋に、立派な机がならべられていた。部屋には誰もいなく、時計のカチコチ動く音だけが部屋に響く。ユージはすぐに台所の方へ戻った。
「あら？どうなさったの？」
「すみません…あちらの部屋はなんだか立派すぎて落ち着かないというか…それに一人で食べるのも寂しいし…お邪魔じゃなかったら、こちらで食べてもいいでしょうか？」
「ふふふ。邪魔などこか大歓迎ですよ。そちらにお座りなさい。」
ユージは大きな調理台らしき机に並べられている、背もたれのない丸い椅子に座った。　マーサーがパンに何かをはさんでいる。
「あの…それは何と言う食べ物なんですか？」
「これはね、サンディと言って、パンに好きなものを挟むだけの料理なの。簡単でおいしいからアイカ国のお昼はたいていこれなの。」
本当にすぐに出来上がり、マーサーが皿に乗せてユージの前においた。ユージはナイフとフォークが机の上にないか探したが、どこにもなかった。マーサーも出す気配がない。
「…これは、このまま手で食べていいんでしょうか？」
「あら。ごめんなさい。そうよね。初めてなら分からないわよね。そう、そのまま手で持ってバクっとかぶりついて食べて頂戴。」
「わかりました。」

ユージはサンディを手にとり、思いきりほおばった。あまりの美味さにまたユージは目を丸くする。
「おいしいです！昨日の食事もこんなにおいしいパンやスープは初めてだと思いましたが、これも、ものすごくおいしいです！」
「ふふふ。お世辞はいいのよ。」
「お世辞じゃないです！本当です！温泉も最高だったし、ベッドもふわふわで、こんなおいしい食べ物が出てきて…俺は天国に来てるんじゃないですよね…？」
マーサーはそのユージの言葉を聞いて大笑いした。
「まぁまぁ、大丈夫よ、あなたも私もちゃんと生きてますから、ここは天国じゃありません。」
「そ、そうですよね…すみません。変なことを言ってしまって。」
ユージは急に恥ずかしくなって顔が熱くなる。
「ふふふ。私、ちょっと失礼するわね。すぐに戻りますけど。主人があなたが起きてきたら、教えるようにと言われてるものですから。ゆっくりお食べくださいね。足りなかったら、彼女たちにもう一つ作ってもらって頂戴。」
「はい。」
マーサーは食堂から出て行った。
ユージはサンディをまた食べ始めた。そして、ふと思い出す。
「あの…昨日熊に襲われて重傷だった人の具合はどうなんでしょうか？」
すると一人が手を止めて、ユージを見るとにこりと笑い答えた。
「ユージ様にいただいた薬のおかげで、大事はいたらないそうです。」
ユージは飲みかけていたお茶を吹き出しそうになった。
ユージ様？
「さ、様は結構です。ユージと呼び捨てにしてください。」
「でも、私たちはこの家のお客様に呼び捨てはできませんわ。では…ユージさん、と呼ばせていただきます。それでよろしいでしょう

か？」
「は、はい。」
ユージはなんだか急に緊張し、残りのサンディは味が分からなくなってしまった。
「もう一つ召し上がられます？」
「い、いえ。これひとつで十分です。」
そうこうしているうちに、マーサーが戻ってきた。
「もう、お食事はお済み？これから主人の所へご案内してもよろしいかしら？お礼をしたいと申してますの。」
「はい。お昼、ごちそうさまでした。本当においしかったです。」
ユージは立ち上がると、食器を流し場に持っていこうとした。
「あら、ユージさんはお客さんなのですから、そのままにしておいてくださいな。私たちでやっておきますわ。」
さきほどユージと話した女中が言った。
「あ…そうですか。…では、すみませんが、よろしくお願いします。」
ユージは彼女に頭を下げると、マーサーについて、食堂を出る。玄関の手前の部屋に向かった。応接室らしい。そこへ通されると、マーサーの主人らしい男性とカイがいた。

部屋に入ると男性が笑って立ちあがって手を差し伸べてきた。ユージも手を出し握手する。
「この館の主のネイルです。昨日はこのカイをはじめ、みなを助けていただき、ありがとうございました。ユージ殿の傷薬は止血の作用もあるようですね。あれだけの傷を負いながら、ほとんど出血がなく医者が驚いていました。」
「いえ。あんな場面に遭遇したんですから…当然のことをしただけです。」
「まぁ、お掛けください。」
ユージはソファに腰かけた。これがまた埋まりそうなほど柔らか

かった。ネイルとカイも腰掛ける。するとネイルがにこやかに言った。
「ユージ殿はリート国からやってきた旅人ということですが、薬屋の息子なのですか？リート国が薬の国とはいえ、傷薬や痛みどめだけでなく、はたまた熊をしびれさせる薬など、普通の者が持てるものではないと思いましてね。あの国の薬は恐ろしく高価ですから。」
ユージは氷ついた。
…そういう事だったのか！
あのフウという怪我人に薬を分けようとした時、カイはかすかに悩んでいるようだった。熊をしびれさせるような薬を持つ得体のしれぬ若者の薬を受け取っていいのかどうか考えていたのだ。しかし、あのフウの様子を見て受け取ることにしたんだろう。あの薬をつけなければ、町まで持ったかわからないような怪我だった。
…カイが俺をこの家に招待したのは、礼のためなんかじゃない。リート国のスパイかもしれない得体の知れない俺を捕まえて、何の目的でこの国にきたのか聞きだすためだったんだ。
ユージの顔がどんどんこわばっていた。そんなユージの様子にネイルから笑みが消える。
「単刀直入に申す。そなた一体何者だ。あのように突然出くわした場面に、冷静に矢にしびれ薬をつけ、自分に突進してくる熊の両目に外すこともなく矢を射る。…リート国の兵士は薬をうまく扱うと聞いておる。そなた、リート国の兵士であろう。」
あの薬はリート国の兵士が訓練や実戦の時に常に持たされるものだ。あの荷物の中にそれを発見したときは驚いたが、これから先どんな目に合うか分からなかったから、ユージはただ単純に喜んだ。…それが逆にこんな風に自分の身を危ぶませることになるとは…せめてしびれ薬を使っていなければ…
しかし、あんな巨大な熊を相手にしびれ薬を使わず倒すことは、弓矢の達人であったユージにも不可能だった。かといって、あの場面をユージはみすごすことはとうてい出来なかった。一晩の御礼を

断っていたとしても、後から兵士にとらえられただろう。
ユージは本当のことを話すしかないと思った。大きく深呼吸をする。

「…はい。確かに、私はリート国の3級兵士でした。ですが…3日前、私は国外追放の身となりましたから、今はリート国のものでも、兵士でもありません。」
「国外追放とは…一体、おぬし何をしたのだ。」
「…身分の高い女性と…」
ユージは思わず、ネイルから目をそらす。
「…恋仲になったためです。」
ネイルはしばらく黙ったままうつむくユージを見ていた。
「なるほどな…。」
「ネイル様。そのような事が犯罪になるのですか？しかも国外追放とは…罪が重すぎやしませんか？とても信じられません。」
ユージはその言葉に驚いてカイを見た。
「カイ、お前はまだまだ勉強不足だな。ほとんどの国は王族や貴族と、一般国民とは結婚することは出来ぬ。彼らは国民を人と思っておらぬからな。大事な娘や息子を家畜と結婚させるわけにはいかぬだろう。だから彼らは階級のある者同士だけで結婚するのだ。王子や王女が他国の王子や王女と結婚するのも、そういう理由だ。もっとも、それは自身の子供を人質として送ることで、国同士の争いを止めるという目的もある。ユージ殿はまだ国外追放でマシとも言えよう。一方的に身分のあるものが、身分のないものを好きになり、自分の思い通りにならぬからと、わけのわからぬ罪を着せて殺してしまう例など、山ほどある。そうだな、ユージ。」
「は、はい。」
「それで、そなたは、何故この国へまいられた。」
「アイカ国は巨大な国ですし、私のようなものでも何か仕事があるのではないかと…」

「ふむ…そうか。」
ネイルはしばらく黙り込む。
「…カイ。お前はどう思う？ユージ殿の言うことが信じられるか？」
「正直、国外追放になった理由は俺には信じられませんが…。しかし、昨日のような場面で自らの命の危険も顧みず我々を助けてくれたような人間がスパイや犯罪者とも思えません。何より、ユージ殿の誠実な人柄は、昨日と今日の短い時間で伺いしれます。俺はユージ殿を信用します。できれば、ここに留まっていただき、われわれにあの見事な弓矢を教授してもらいたい。」
言葉の最後で、カイはユージを見て笑いながら言った。ユージは思いもよらぬ話の展開に、動揺するばかりだった。それを聞くとネイルも笑って言った。
「私もまったく同じ考えだ。マーサーが喜ぶな。さきほど私にユージ殿が起きてきたと教えにきたとき、あのマーサーがうれしそうに早口でユージ殿のことをベタ褒めしておったからな。よし！ユージ殿。そなた明日からこの館で働くがよい。カイも含め、昨日の若者たちは現在兵士訓練学校に通っておるものたちでな。午前中、学校が終わった後や土日にやってきて、訓練をしたり勉強したりしている。私はそんな場を彼らに提供しておるのだ。彼らがおる間、弓矢を見てもらえぬか。」
ユージはネイルの話が信じられなかった。スパイとして捕らえられて牢獄にいれられるに違いない、そう思っていた。そして、殺されるか奴隷とされるか…どちらかになるに違いないと。ユージの目から涙があふれる。
「…身に余るお話、よ、喜んでお引受けいたします…こんな立派な場所で…働けるなんて、ゆ、夢みたいです…あ、ありがとうございます…」
ユージはネイルに深く頭を下げ、涙声でそう言った。
ネイルとカイはそのままユージが泣いているのを黙って見ていたが、しばらくするとカイが話しかけてきた。

「ところで、ユージ殿。あなたは、おいくつですか?見たところ私と変わらないと思うのですが…もう兵士をしていたという話ですから、私より年上なのでしょうね。」
ユージは涙を拭くと顔をあげた。
「私は、１６歳です。」
「１６?私と同い年ではないですか！リート国ではそのような年で、みな兵士となるのですか?」
「いえ。全員というわけではございません。…けれども、私の場合は他の者より早く、１０歳で訓練学校に入り、１２歳で入隊しました。」
「１２！それでは、もうその年で兵士として４年も働いておられたというのですか！」
それを聞いていたネイルが急に大笑いした。
「これはこれは！カイ、お前たちはどうやら、最高の講師を手に入れたようだな。」
「はい。ネイル様！」
カイが目を輝かせて答えた。
「いえ。私などそんなすごいものではありません。弓矢は確かに自信がありますが、剣術の方は得意ではありません。」
ユージはあわてて否定した。
「いずれにせよ、カイたちよりは、上のはずだ。とにかく、そのすばらしいという弓矢の腕前を見せてもらうか。まだ、みな訓練しておるはずだ。」

7話　ネイルの館2

ユージはネイルとカイについて、館の奥の広場にやってきた。そこでは、11名の若者がいた。みな白い服を着ている。二人がペアになって、先の黒い棒を剣のように使い試合をしていた。しばらく見ていると何故白い服を着ているのかが分かった。棒の先が黒いのはどうやら炭らしく、服に触れると汚れがついた。つまり、剣ならば切られたということだ。これなら危険もないし、何やら面白そうだ。ユージは、ふと若者の中に1名の女性を見つけて驚いた。…この国では女性も兵士となるのか…

ユージたちの姿に気がつくと、みな腕をとめこちらを向いた。

「これは、我が国の国技でネーチェという競技だ。まぁ、見ても分かろうが、我が国では安全な剣術の練習方法として軍でもこれを採用しておる。…どうだ。ユージ、やってみるか。」

「はい。」

「なら、俺が相手をします！」

カイがそう答え、白い服を着ている服の上から着る。ユージも白い服をもらい着た。二人に棒が渡される。ユージは棒をまじまじと見て数回振ってみた。

「では、よいか？二人とも。」

二人は向かい合った。

「では、はじめ！」

ネイルの合図と共に、カイがユージに振りかかってきた。ユージはなんなくするりとよける。その瞬間、ユージはカイを見ずに後ろに棒を振った。当たった感触がした。振り返るとカイの腹に黒い線が書かれていた。どよめきが起こった。

「なんだ、なんだ。全く相手にならんじゃないか。」

「ネイル様、ユージが強すぎるのです！なにが、私なんてすごくないだ！」

ユージはカイが自分の事を呼び捨てにした事がなんだかうれしかった。
「いや…剣の方は本当に得意じゃないんだ。訓練学校でも同い年の友人の3人に一度も勝ったことはなかったし…軍でも剣を使うような部署には、ほとんど回されたことはなかった。」
「なら、そいつらが異常に強すぎるんだ！」
カイは、まだプンプン怒っている。
…確かに、それは一理あるかもしれないな。訓練学校には１６歳の者もいたのに、それを差し置いて、あの3人は１０歳の時から常にトップを争っていたもんな。
ユージはリート国で、よく国境付近に現れる盗賊の退治に駆り出された。それは弓矢の腕前をかわれてのことだと思っていた。実際、実戦でもほとんど剣を使うことはなかった。…でも、ひょっとしたら、剣の腕前も見込まれていたんだろうか？
「では、私が相手になろう。」
ネイルが白い服を着た。まわりがざわついた。ネイルが棒を持ちユージと向かい合う。

今度はユージの方から向かっていった。ネイルが身をかわす。その瞬間、腕が動くのが見えた。ユージは瞬時に後ろに跳びはねる。ネイルの棒が空を切った。ユージがその振り切った腕めがけて振り下ろす。ネイルもすばやくそれを察知し腕をひっこめる。その瞬間ネイルの体制が崩れるのを見た。ユージは左手に棒を持ちかえ、下から棒を振り上げる。やった！とユージは思った。が、棒は空を切った。ほんのわずか、距離が足りなかった。
ネイルが棒を下ろした。
「これは、これは。カイ、確かに、お前たちの出る幕ではないな。かなりの腕前だ。」
ネイルがうれしそうに笑う。
「いえ…そんな…」

ユージは自分の持っている棒を見た。
…ネイル様が強いとはいえ、なかなかうまく扱えないものだな。
「…その方はそれに慣れておらぬから、どうも扱いにくいようだな。」
ユージはネイルに自分の考えていたことを指摘されて驚いた。
「誰か、試験用の剣を持ってこい。」
「はい！防護服もですね！」
カイが言った。ネイルはしばらくユージを見て考えていたが、
「いらん。」
と言った。カイは驚いた顔をした。いや、カイだけではなかった。他のみんなも驚いた表情をした。
一人が広場の隅にある小屋に走っていき、すぐに剣を2本もってやってきた。ネイルはそれを受け取るとユージに一本を手渡した。
「ネーチェは、あくまで遊びだ。試験の時には、これを使って行う。この剣は当たっても怪我にならぬような細工がしておるから安心しろ。」
ユージは剣をよく見た。なるほど刃がまるく加工されていた。じっくり見て、また何度か振ってみる。普通の剣とまったく同じ感触だった。
「では、よいかな。」
「はい。」
ユージとネイルはさきほどと同じように向かい合う。
その瞬間、ユージは得も知れぬ何かを感じた。殺気だった。
…落ち着け、焦ってはダメだ…これは真剣じゃない。これにやられても死ぬことはないんだ。…とにかく、向こうの出方を見るんだ…自分から出てはいけない…
あたりは、二人の緊迫した空気に静まり返る。
二人はお互いを見つめながら、輪を描くようにじりじりと歩く。
ふと、ネイルがわずかに左に重心を傾けるのを感じだ。
来る！

そう思ったユージは、ネイルが動きだした瞬間に左によけた。ネイルがユージの右側に剣を振る。ネイルが背中を見せようとした。その背中めがけて、ユージは剣を振りあげる。ネイルがそれを感じ地面に伏せる。ユージはが元に伏せたネイルを飛び越ようとした。ネイルがユージめがけて寝ころがりながら剣を上に振り上げる。ユージは飛んだままそれを剣でたたき返す。ユージが地面に足をつけ、ネイルを見ようとしたときには、ネイルはすばやく起き上がり、ユージにむかっていた。ユージは右に転がってよける。そしてまた二人向かい合う。二人はまたじりじりと輪を描く。ネイルの体がまたわずかに動くのが見えた。こんどは左にくる。そう思ったユージは右へくるりと身をかわした。一瞬ネイルの姿が見えなくなる。ユージが危険を感じ身を伏せようとした瞬間、背中に剣があてられたのを感じた。ユージはそのまま止まった。

…負けた。

剣を下ろし、ネイルの方に向いた。ネイルも剣を下ろした。二人は向い合うと、軽く頭を下げた。

二人の戦いが終わっても、まわりは固まったように静かだった。ユージは息が上がり、肩を上下に動かしながらネイルを見ていた。

「カイ、どうやらお前たちは本当に最高の講師を迎えたらしい。1等兵でもリーダーが出来るほどの腕前だ。…いや、ひょっとしたら近衛隊でも通用するかもしれん。」

ネイルがそういうと全員が目を丸くする。

「明日から私はお役御免だな。」

ネイルが笑ってそういうと、大歓声があがった。みんながユージの周りを取り囲む。

「すごかった！」

「本当に講師をしてくれるのかい？」

「こんなの初めて見た。」

カイも隣にやってきて、ユージにいった。

「本当にすごかったぞ！明日から楽しみだ！」
ユージは幸せでいっぱいだった。弓矢では何度もほめられたが、剣でこれほどほめられたことは一度もなかった。
「こら、こら。お前ら。ユージの特技は終わっておらぬぞ！昨日、遠出に出ておらんかったものも、昨日の話は聞いておるだろう。これから弓矢の腕前を見せてもらうとしよう！」
一斉に拍手がおこった。なんだかユージは恥ずかしかった。

広場の隅には的が何個かあった。みなでそちらに移動しユージは弓矢を持たされた。
少し離れてみなが見守る。ユージは的を見た。そして、弓を何度も触ったり、引いたり、弾力性を調べた。矢の方もじっくり、長さ、太さを確かめた。そして矢を持ち、ゆっくりと弓を構える。落ち着いて一つの的に集中する。
矢をはなった。矢は的の左をそれた。
ユージは、ふぅ、と一息つくと、また矢を構えた。そして再び矢を放つ。今度は的の左あたりに当たった。拍手が起きた。だが、ユージは首をかしげて、再び矢を構えた。今度はど真ん中にあたった。さらに大きな拍手が起きる。ユージは今度はつづけて3本の矢をすばやく順番に放った。すべて中央に吸い込まれた。
今度は拍手の変わりにどよめきが起こった。カイがユージに向かって走ってきた。みんなもそれについて走ってきた。後からネイルもゆっくりこちらに向かってくる。
「いや、本当にすごいな。」
カイがユージにいった。
「けど、突進してくる熊の目に矢をあてるくらいだからなぁ。放り投げた果物に命中させるとか、そういうのはどうだ？」
「うん。もちろんできるよ。でも、この弓矢じゃ無理だ。リート国のものより少し大きいから微妙に感覚が違っていて。それにこの弓矢は左に矢がそれる傾向があるから、やりにくくって。」

カイは驚いた。
…そんなやりにくいと思っていた弓矢であれだけ的にあてることができるのか。
「カイ。お前、家に戻ってユージの部屋から弓矢と、マーサーに頼んで何個か果物を貰ってきなさい。」
「わかりました！ネイル様！」
カイはものすごい勢いで家へ走って行った。その間、またユージはみんなに取り囲まれ、質問攻めにあった。ユージは早くカイが来ないかと思った。
やがて、カイがユージの弓矢とオレンジを持ってくる。ユージはほっとした。
ユージはカイから弓矢を受け取り、矢の筒をいつものように右肩にかけ弓を持つ。
「じゃあ、カイ。投げて。」
カイがオレンジを投げた。ユージはオレンジが上がり再び落ちてくる寸前で軽々と射抜いた。次にカイはオレンジを3つ同時に投げてみた。3つとも同じように次々に射抜かれていった。拍手が沸き起こる。
「じゃ、ひとつのオレンジを投げるからそれに矢を何本も射ることはできるか？」
「うん。できるよ。」
カイは再びオレンジを取り、ひときわ高く空へと投げた。ユージはすぐに矢を何本も放つ。次々に矢が刺さる。3本の矢が刺さり、やがて矢の刺さったオレンジが落ちてきた。3本目が刺さってからまだオレンジと地面との間はあった。カイが不思議そうに聞いた。
「まだ、いけるんじゃないのか？」
「うーん。オレンジは、3本が限度なんだ。あれ以上やると空中でオレンジが分解するから。メロンだったら、最高7本の矢を刺したことがある。」
またまたカイは驚いた。ふいに空を向いて飛んでいた鳥を指差し

た。
「じゃあ、あの鳥は？」
「それは、ちょっと無理だ。でも…」
ユージは下を見ると、足元にあった石を2~ 3個手に取った。
「ちょっとみんな離れて。」
みんなあわててユージから離れた。ユージは思い切り石をつぎつぎと鳥めがけて投げた。石はどんどん垂直にあがり、2つ目の石が鈍い音とともに鳥にあたった。鳥がすぅっと一直線に落ちてくる。そして、どさっと地面に落ちた。石もほぼ同時に落ちてきた。ユージは鳥に向かって走って行って、捕まえてみんなのところに戻ってきた。
「実は、石投げも弓矢と同じくらい得意なんだ。この石投げと弓矢の腕前のおかげで、俺はいつも軍では食糧調達係だった。俺がいると食糧に困らないからみんな喜んでた。」
その話を聞いてみんな大爆笑した。カイも腹を抱えて大笑いしていた。
「しかし、どうやって、動いているものを狙うんだ？何かコツがあるのか？」
「コツというか…何となく、次はこうなるんじゃないかって、わかるんだ。」
「観察力がするどいんだな。」
ネイルがみんなの後ろから声をかけた。みんな後ろを振り向いてネイルの方を見た。
「私と剣で戦ったとき、私が動こうと思った瞬間、ユージは動いていた。おそらく私がわずかに体重を移動するのを見ているんだろう。だから、私はわざとユージを誘って彼に背中を見せさせ、私を見せないようにしてとどめをつけたのだ。」
「そうか…そういえば、俺の友人たちにもいつも後ろからやられてました。」
「まぁ、お前なら訓練しだいですぐに後ろの気配も察することがで

きるだろうよ。カイのようなヘタクソには後ろが見えていたからな。」
「ネイル様、ヘタクソとは…。」
カイが情けない声でいった。
「そのとおりだろう？悔しかったら、ユージにせいぜい鍛えてもらうんだな。」
「あっという間にユージを倒せるようになってみせます！」
「それは、信用できんな。」
ネイルとカイのやりとりに、みんな大笑いだった。ユージもつられて笑う。
「さ、もうそろそろ暗くなってきた。みんな早く風呂に入って帰るがよい。さっきも言ったが、このユージは明日からみんなの講師としてこの館で働いてもらうことになった。いろいろ聞きたいこともあるだろうが、ユージはいろいろな事情があって、我が国にやってきた。なぜやってきたか、その理由を聞かないでやってほしい。」
ユージはそのネイルの心づかいがうれしかった。正直、それを尋ねられるが一番辛かった。
「わかりました！」
みんな元気に返事すると、弓矢や棒を倉庫にしまいにいった。カイもそうしていたので、ユージも一緒に手伝いに行こうとした。するとネイルが声をかけた。
「その鳥を貰おう。さきに家に戻ってマーサーに今日の夕食にしてもらう。」
あわててユージは鳥をネイルに渡した。
「それから、あいつたちはみなこの町のものだが、カイだけは首都ペネからやってきておる。カイの父とは知り合いでな。頼まれて面倒を見ておるのだ。だから、カイはこの館に住んでおる。何か困ったことがあれば、遠慮なくカイに聞くがよい。」
「分かりました。」
「では、また夕食の時にな。」

ネイルはユージに笑って手をあげると館に戻って行った。

8話　アイカ国

みんなで温泉に入って騒ぎあい、カイと一緒にみんなを門まで送っていくころには、ユージとカイはすっかり意気投合し仲良くなっていた。

二人が、食堂に行くと、もうすでに料理がテーブルにならんでいた。ユージがさっき石で仕留めた鳥も、丸焼きになってのっており、香ばしい匂いを漂わせていた。

テーブルには、ネイルと昨日ユージの荷物を持った大男が座っていた。マーサーがお茶を持って二人に入れている。

「ユージ。この鳥ありがとう。おかげで今日の夕食が豪華になったわ！さあ、あなたの席はそちらよ。」

ネイルと大男の前に、席が二つあいていた。カイが先にネイルの前に座ったので、ユージはその隣の大男の前に座る。マーサーはみんなのコップにお茶を入れ終わるとネイルの隣に座った。

「さあ、いただきましょう！」

マーサーがユージの落とした鳥をみんなに取り分けはじめる。ユージはスープを飲んだ。昨日とは違うスープで今日はトマト味だった。ユージはあまりの美味しさにまた目を輝かせる。

「これも、すごくおいしいです！」

「ふふふ。ありがとう。この家では誰も私の料理をほめてくれないから、本当にうれしいわ。」

「おいしいですよ！いつもそう思っていただいてます！」

と、カイが言うと、

「マーサー様、私もおいしいと思っていただいております。」

「私もだ。いつも感謝しておる。」

大男とネイルがあわててそう言う。

「はいはい。私に言われて言うんじゃ、信用できないですけどね。」

ユージは思わず笑ってしまった。

すると、目の前の大男と目があった。大男がユージに笑顔を見せる。
「まだ、私は自己紹介をしてませんでしたね。私は、ネイル様の秘書のセンといいます。」
「そうですか。昨日は荷物を運んでくださってありがとうございました。」
ユージはそういうと、いったん、スプーンを置いた。そして、改めて他の４人に向かって頭を下げる。
「これから、こちらでお世話になりますが、どうぞよろしくお願いします。」
すると、４人もいったん食事を中断し、ユージに頭を下げた。
「しっかし、本当に、ユージは礼儀正しいなぁ。ユージとこれから比べられるかと思うと、俺、なんだかやりにくいわ。」
カイが苦笑しながら言った。
「そ、そうか？それは悪かった。…でも、俺は普通にしてるだけだからなぁ…」
「まぁ、それがお前のいい所だからいいんだけどさ。だから、ネイル様はお前を雇おうと思ったわけだし…」
…そうか、そうだったのか。俺のどこを見てカイやネイル様やマーサー様が気に入ったのか不思議だったけど。
「ところで…ネイル様もセン様も軍人なのですか？」
「私はともかく、どうしてセンまでそうだと思ったのだ？」
「いえ…今セン様の手に剣たこがあるのがチラッと見えたものですから…」
ネイルが一瞬驚いた顔をした後、苦笑する。
「…お前は、本当に観察力があるな…その昔、私はこの国の近衛隊長官、センは副長官を務めておったのだ。」
ユージはネイルがそのような高い身分のものだったのか、と驚いたが納得した部分もあった。
「どうりで…ネイル様と剣で向き合ったとき、本当に怖かったです。

」
「ははは！さすがだの。お前は私の殺気を感じたという訳だ。」
「はい。殺されるかと思いました。」
「…殺されるって…訓練用の剣なんだからそんな心配ないじゃないか。」
「いや、私はユージを殺すつもりで戦った。最初にユージとネーチェで戦ったとき、これは本気でやらねば、ユージの本当の能力はわからぬと思ったからからな。しかし、ユージとて同じだろう。私を殺すつもりで挑んでいたはずだ。」
「そうなのか？」
目を丸くしてカイが言う。
「うん。だって、殺されたくなかったら、相手を殺すしかないだろう？」
あっけらかんとユージがそう答えた。
カイは、ユージのその態度にただただ驚くだけだった。そして、ある事実に気がつく。
…そうか。こいつ、人を殺したことがあるんだ。
アイカ国は有史以来戦争をした事がない。したがって、兵士は誰一人として人を殺した事などないのだ。
…俺がこいつにあっという間に負けたのは、こいつの方が兵士を４年もやっていたからじゃない。こいつが本当の戦闘を経験しているからだ。こんなヤツに俺がかなうはずがない。
「しかし、カイ。お前はよい友人を拾ったようだな。ユージはお前にとって、外からの新しい風だ。この国にいただけでは知りえぬ事をいろいろ知ることが出来よう。」
カイはまじまじとユージを見る。ユージがきょとんとして自分を見ていた。
「…そうですね。昨日から何度ユージの行動や言動に驚いたことか。」
「いや、俺はそんなすごい人間じゃないよ…」

ユージは恥ずかしくて目を伏せる。
「また、それか。自分が優秀だと気づいていないところにも驚きだ。俺の前で二度と、自分の卑下する言葉を吐くな。その度に、俺は自分が情けなくなる。」
カイがふくれっつらをしていた。
「ご、ごめん。わかった。気をつけるよ。」

そのまま和気あいあいと食事が進んだ。マーサーがユージのとった鳥がおいしいと連発した。それを聞いてユージはちょっとした考えが浮かんだ。
「あの…よかったら、時々何か狩ってきましょうか？ここの待遇はどうもよすぎるので、なんだか申し訳ない気がしますし…それに、動く動物を矢や石で狙うのは常にやっていないと、カンが鈍ってしまいますから。」
「それはいい！俺も一緒に行くぞ！」
カイが目を輝かせる。
「いや…カイ。悪いけど、君が来たらみんな動物が逃げちゃうよ。動物って本当に気をつけてても、こっちに気がついてすぐ逃げちゃうんだ。」
「ちぇ。分かったよ。」
カイが肩を小さくした。子供みたいなカイにユージは思わず苦笑する。
「では、センを連れていくがよい。センならお前の邪魔はせぬ。思わぬ大物を仕留めてしまった時のことを考えても、センが適任だろう。それから、私たちはお前を信用しておる。だが、元軍人の身としては、完全に信用することはできんのだ。すまぬが、当分の間私たちの監視下にあると思ってくれたまえ。したがって、お前が一人で外出することを禁ずる。必ず誰かと共にするように。もちろん、敷地内では自由に一人で行動してもよい。」
「はい。わかりました。」

当然のことだった。そうはっきり言ってくれたのはうれしかった。こっそり監視されているより、ずっとすっきりする。
「いつ狩りに行くつもりだ？」
センがユージに尋ねた。
「夜の動物と昼の動物が交差するころが一番いいのです。夕方は無理そうですから、早朝にしようと思います。このあたりは、何時頃に夜が明けるのですか？」
「今は５時ごろだな。」
「森はここからどのくらいかかるのでしょう。」
「馬で１０分もいれば、適当な森がある。」
「そうですか。では、４時半に出発したいと思います。大丈夫でしょうか？」
「大丈夫だ。明日、４時すぎに玄関の扉の前で待ち合わせとしよう。」
「はい。」
そう話をしているうちに、全員が食事を食べ終わった。ユージが席を立つ時に、おいしい夕食ありがとうございました、というと、みんなが慌ててユージに続いてマーサーにお礼を言ったのが、ユージはとてもおかしかった。

夕食の後は、それぞれ自分の部屋へ戻った。カイの部屋は階段から上がってすぐの部屋でユージの隣の部屋だった。
ユージは部屋に入るなり、ベットに寝転がる。また、布団のいい匂いを思い切りかぐ。
…なんだか、信じられないことになったなぁ…当分の間は野宿だと思っていたのに。こんなところでこれから過ごすのか…。
ユージはリディアやイアン、デミー、ダレン、そして自分の家族に教えたかった。きっと、今も自分がどうやって過ごしているか心配しているだろう。

ドアをノックする音が聞こえた。ユージはベットから起き上がって、ドアを開ける。カイだった。手に本をたくさん抱えている。
「おう！ちょっと入っていいか？」
「うん！」
カイはユージの部屋に入ると、机の上にその本を置いた。５~６冊はあった。
「これさ、入隊試験の教科書なんだ。ネイル様が渡しとけって。」
「きょ、教科書？それに入隊試験？」
ユージは目を丸くする。
「なんだ。リート国では入隊試験がないのか？」
「試験って、一体何をするんだ？そういえば、ネイル様はあの剣が試験用だって言ってたな。剣にも試験があるのか？」
「あるさ！リート国ではないのか？」
「ないよ。」
「では、どうやって軍隊に入るんだ？」
「１２歳~１４歳の間に訓練学校に入れられて、２年間すごしたのち軍に入る。俺みたいに１０歳から入る人もいるけど、普通は近衛隊の息子たちだけなんだ。」
「そうか…」
カイは部屋の端にあった、イスを机の前にもってきて座った。ユージも座った。
「引きだしの中に紙が入っているから、ちょっととって。」
ユージが机の引だしを開けると、紙が沢山入っていた。それを見てユージはびっくりした。
「か、紙がこんなにたくさん！！」
「ああ、そうか。他の国じゃ、紙は高価なものだったな。わが国は紙が特産物だから、割と手に入りやすいんだ。そうか。だから、試験が出来るのかな？紙がなければ、テストもできないし、そういや、教科書だって、みんなに配ることもできないな。ま、とにかく取ってくれ。」

ユージは紙をカイに渡した。カイは机の上にあったペンをとり、紙に図を描きながら説明しだした。
「うちの国じゃ、だいたい１４歳くらいから訓練学校に入って勉強したり、訓練したりする。で、１６歳になると軍の入隊試験を受ける資格が与えられるんだ。でも、１６歳で受かるやつは少なくて、だいたい１７歳から１８歳で受かるヤツが多い。入隊の試験は、年に2度ある。次の試験は、１１月の終わりだ。試験は実技と筆記試験の二つで行われ、実技は、剣術・弓術・馬術・体力測定の４つからなる。剣術が２００点であとは１００点満点。だから実技試験は５００点満点だ。筆記試験は、歴史・地理・地学・医学・数学。それぞれ１００点満点の合計５００点満点。総合計１０００点で行われる。６００点以上で合格だ。もっとも、実技は３００点以上をとらないと足切りにあう。」
「足切り？」
「ああ。軍隊に入るのに実技が悪かったら話にならないだろう？だから、合格点を設けてるんだ。それを足切りと俺達は言っている。一般兵は1～5等に別れていて試験の点数によってその配属が決まる。5等兵が６００点以上、４等兵が６３０点、３等兵が６８０点、2等兵７２０点、１等兵が７５０点以上だ。」
「そ、そんな風に兵の階級を決めているのか？」
ユージはあまりの驚きに大声を出す。
「そうさ。完全能力制さ。」
「じゃ、何か？努力次第で誰でも上の階級に行けるってことなのか？」
「そうさ。」
ユージが信じられないという顔をした。
「…そういや、お前3級兵士だったって言ってたな。どんな身分なんだ？」
ユージの顔が急に曇った。
「…一番下の…身分だよ。農民とか…召使とか…そんな職業の人た

ちと同じだ…」
「…そうか。でも、お前はもう、うちの国に来たんだから、もうそんなの関係ない。だから気にするな。だいたい、うちの国には身分なんてものはないから。」
「ええ！！どういう事だ？」
「どういう事って言われてもな…。とにかく、好きな職業につけるし、当然身分が存在しないから誰とでも結婚できる。」
「ええ！誰とでも？？でも、いくらなんでも貴族や王族とは無理だろう？」
「うちの国には、貴族や王族も存在しない。」
「は？？だってアイカ国にも王様はいるじゃないか！」
「…まぁ、全部話を最後まで聞いてくれ。そうしたら分かるから。」
「…分かった。」
…王族や貴族が存在しないだって？？もし、俺とリディアがこの国に生まれていたら、俺達は結婚できたのか？そんな夢みたいな事が、この国では叶うのか？
カイがまた紙に書き始めたので、ユージはそれに目を落とす。
「でな、一般兵の上に近衛隊があってな、軍では最高の階級だ。だから、別試験となってて、1等兵でなければ受けられない。」
「そうか！アイカ国では能力があれば、誰でも近衛隊にだってなれるんだ！すごいな！」
ユージが急に目を輝かせた。
「そうさ！で、まぁ、当然だが、その近衛隊中で優秀なものが近衛隊長官や副長官となる。で、この近衛隊長官を経験した者の中でももっとも才能が抜きんでているものが王に認められ、やがて皇太子となり王となる。」
「なんだと！王までそんな風にして決めるだと？？？とても信じられない！だったら、王の子供たちはどうなるんだ！」
ユージは思わず立ち上がってどなった。
「まぁ、落ちつけよ。」

そう言われて、ユージは自分が立っていることに気がつき、座りなおした。
「王の子供も、ただの兵士の息子も、農民の息子も、この国じゃみんな同じ子供さ。もっとも、同じとは言い切れないな…うちの国の人間は才能があれば誰もが王になれる可能性があるが、唯一王の子供たちだけが、王になることができないから。」
「ええ！それは何故だ！」
「後継ぎ争いで国を分裂するのを防ぐためじゃないかと俺は思ってる。他の国ではそんなことはよくある話だと聞いているし。それに、このアイカ国自体がそうやってできた国だからな。」
「後継ぎ争いで？」
「ああ。まぁ、このアイカ国だけじゃないよ。１０００年以上も前、昔このあたり一帯大きな一つの国だったんだ。すばらしい王の元でどんどん領土をひろめ、その国は繁栄を極めた。王には４人の息子がいた。彼らが大きくなると、王は国を４つの郡にわけ、それぞれの長とした。やがて、誰が王にふさわしいか争うようになり、とうとう戦争が起きる。争いの果てに結局、国を４つに分裂することで合意する。そのあと、それぞれがまた後継ぎ争いをして分裂したり、攻められて滅んだり…そうして、今の国々ができたんだ。リート国だって、そのうちの一つだ。つまり、俺たちはもとはみんな同じ国の人間だ。だから、同じ言葉を話し、同じ文字を書く。山の向こうのソイ・モイ国がさ、言葉も違えば字も違うのはそういう事さ。」
「山の向こうに国があるのか？…そんな事、初めて聞いた。」
「俺だって話に聞いてるだけだ。国交もまったくないしな。まぁ、たまにこっちからも、向こうからも旅人は行ったり来たりはしてるらしいけど。」
「ふーん。そうなのか…一度、そのソイ・モイ国に行ってみたいな。」
「俺も初めて聞いた時、そう思ったけどさ、侵略をしないことが暗黙の了解となってるから…俺は兵士になりたいし、兵士がそんな所

へいって、もめ事になったらまずいだろう？だから、無理だと諦めてる。」
「…そうか。じゃ、リート国で兵士だった俺もまずいな。残念だな。いつか国交が結ばれる日が来たらいいのにな。」
「そうだな。」
二人はしばし、山向こうの見たことのない国に思いをはせる。
「ごめん。また話を脱線させてしまったな。続きを話してくれ。」
「…どこまで話たっけな。…そうそう、それで、昔あった大きな国が４つに分けられたうちのひとつがアイカ国だ。一番下の息子がこのアイカ国の最初の王なんだ。彼が今のこの国のしくみを作った。きっと、彼は兄弟同士で争って悲しかったんじゃないかな。だから、二度とそんな事にならないようにと願って、こんなしくみにしたんだと思う。おかげで我が国は分裂する事はなく、その時の領土を保っている。」
「へぇ…よく知ってるなぁ、お前。」
「こんな事、アイカ国の人間なら誰でも知ってるよ。その教科に全部書いてある。この国じゃ、兵士にならないヤツも筆記試験だけはだいたい受けるよ。教養をつけるためと、ある程度の点を取ると国から褒美が出るし、優秀なヤツには、軍の事務の仕事なんかが回ってくるんだ。」
ユージは本をあらためて見た。
…この中にそんな話が詰まっているのか。リート国では、誰も国がどうやって出来たかなんて知らないし気にもしなかったな。
「で、話は戻るけど、近衛隊長官が皇太子に選ばれると副長官はその側近になる。当然、皇太子が王となると、王の側近となる。だから、この国の王や側近となるには、ものすごく優秀じゃないとなれないんだ。兵士は２年に１度に一度必ず試験を受けなおさねばならない。点数が足りなければ、等級を落とされたり、軍をやめさせられたりする。もちろん、よければ上の等級へ上がれる。」
ユージはその話にため息をついた。

「この国の兵士はなんだか大変そうだなぁ…。」
「そんなことないよ。軍には訓練義務があるから、実技の方で点が取りやすくなるんだ。だから、筆記試験の勉強を試験前に少しする程度で結構上の等級にいけたりする。近衛隊はさすがにそんなわけにはいかないけどな。俺は、実にこの試験はうまく出来てると思う。我が国は平和だから暇で緊張感がまったくないし、これがなかったら、我が国の軍の質は落ちて、たちまち他の国に攻められて終わりだ。」
「ふーん。なるほどな。…でも、軍が暇だというなら、一体、普段兵士は何をしているんだい？」
「この国の正規軍と呼べるのは、３等以上の兵士なんだ。おもな仕事は警備と警察業務、訓練学校の講師に入隊試験の監督だ。まぁ、講師なると毎日学校だから、結構忙しいけどな。警備の中でも国境警備なんかはアイカ国を攻めようなんて国はないから本当に暇で、そこで交代で警備しながら、訓練したり勉強したりしてるだけって聞いてる。警察業務にしたって、この国は犯罪がないから仕事がほとんどないし、訓練学校の講師だって、平日の午前中だけ。こんな感じだから、兵士はあまりもうからない。４・５等兵に関しては訓練のみ。だから、女性も多い。」
　ユージは今日の訓練に女性が一人いたのを思い出した。
「だから、この国では、農業やったり、商人したりしながら兵士をするヤツがほとんどさ。」
「ええ？兵士が農業や商人？」
「ああ。その方がもうかるし。この国のほとんどの兵士は、みんなでこの国を守るんだ、という使命からやってるんだ。だから、この国は人口が１２万人でそのうちの８万人が兵士なんだ。」
「そ、そんなに？？？」
「そうさ。でも、さっきも言ったけど、正規軍と言えるのはだいたい３万人さ。だから他の国とあんまり変わらないさ。それに、誰も戦争を経験してないから、本当に戦争となった時、どれほどの力に

なるのかは分からない。だから、みんな必死で訓練をしている。」
「…なるほど。」
「それから、もちろん近衛隊はこの国の要だからな。かなりの給料がもらえるよ。近衛隊だけがこの国で忙しい兵士だな。一度近衛隊をすると、その後の生活は一生保障される。しかも近衛隊から離れた後は、そのまま兵士としてのこっても試験を免除されるしな。優秀なものは、皇太子や王のブレーンとなったり、退役してからも、この国の重要な役割を行う業務をすることがおおい。だから、ユージ。この国のえらいさんは、みんな元近衛隊だと思っておけ。だから、近衛隊はわれわれアイカ国の男の子にとって、あこがれの職業さ。心あるものは、みなそれを目指す。」
「お前もか？」
「もちろん。」
カイがニコリと答える。
「…でも、王の子供が王になれないのは、やっぱり変な気がするな。その子供がどんなに優秀な人間でも王にはなれないとしたら、それは国にとって大きな損失じゃないか。だいたい、その子供だって、自分より劣った人間が王になったりしたら…それを納得できるかな？」
「だから、俺は、俺より優秀な人間を探して王にさせようと思っている。」
ユージはぎょっとしてカイを見た。
「お、お前、王子なのか？」
「ああ。」
ユージはあわてて椅子からとびおり、床に伏せ頭をつける。
「も、申し訳ございません。王子様とは申し上げず、無礼な振る舞いを。お許しください。」
カイは椅子を倒すほどいきおいよく立ちあがった。ユージはその勢いに驚いて思わずカイを見上げる。カイがものすごく怖い顔をしていた。

カイは、ユージの腕をつかみ無理やり立たせ、ユージの胸ぐらをつかむと、顔をくっつくほど顔を近づけた。
「お前、2度とそんな態度を俺にするな！今度やったら思いきりぶん殴る！言ったろう！この国では王子も、農民の子も同じだと！」
カイの顔が怒りで真っ赤だった。
…そうか。そうだった。それに、俺たちは友達になったんだ。友達と思っている人間に、今、俺がしたみたいにふるまわれたら、どんなに悲しいだろう。俺は、カイになんて態度をとってしまったんだ。
「ご、ごめん…2度としないと約束する。」
カイは、ユージをつかんでいた手を思いきり振りおろした。ユージはバランスを崩し倒れそうになるのをこらえる。
「なら、許す。」
まだ、カイは怖い顔をしてユージをにらんでいた。
「ほ、ほんとにごめん。」
「ふん。まぁ、いいさ。今のお前の態度で、どれだけリート国が身分差別の厳しい所なのかが、少し分かったからな。…ま、座れよ。」
カイは倒れた椅子を戻し、座りなおしたので、ユージも椅子に座った。
「そういうわけで、俺だけがこの村の人間じゃないというわけだ。オヤジもオフクロも王宮にいるからな。」
ユージはふとある考えが頭によぎった。ネイルはカイの父の知り合いだと言っていた。そして、昔近衛隊長官をしていたと。それに、セン。昔、近衛隊副長官で現在ネイルの秘書。王の側近には近衛隊副長官がなるとカイは言っていた。
恐るおそるユージはカイに聞いた。
「ま、まさか…ネイル様は昔、この国の王様だったんじゃ…」
「本当にカンのするどい男だな。そのとおり。前国王だ。マーサー様は前王妃で、センはネイル様の側近だった。」
ユージはさきほどの食卓を思い出した。前国王に前王妃、そしてその側近に、現国王の息子と一緒に食事をしていたというのか。ユ

ージはあまりの恐ろしさに頭が痛くなってきて、手で頭を押さえた。
「つまり、俺が明日になって、急にネイル様やマーサ様やセン様に態度を変えると、彼らも気分を悪くする？」
「当たり前だ。それに、センは今はただの秘書だからと、様と呼ばれるのをいやがる。」
ユージはため息をついた。
「…これからのここでの暮らしで一番大変なのは、どうやら、それらしい…」
カイが突然大笑いした。
「な、なんだよ。何がおかしいんだよ。」
「そんな事が悩み事なんて面白いなぁ！」
「…好きなだけ面白がってくれ…。」
カイは笑いをこらえながら右手で本をぽん、と叩いた。
「で、この本だ。」
「お前は、ここで講師となった。つまり、この国の兵士と同じ待遇というわけだ。だから、これくらい勉強しておけ、って事だ。」
ユージは本をぱらぱらと見る。地学と医学は少し読んでみて、なるほどと思ったが、歴史と地理はひとつも知っていることがない。…まぁ、この国の人間じゃないから当たり前か。けど、さっきカイが教えてくれたような事が書いてあるなら面白そうだ。
だが、数学と書かれている本を開けるなりユージは仰天した。
「な、なんだ！これ！暗号か？」
「暗号じゃないよ。数学だよ。つまり計算だ。」
「け、計算？これのどこが？」
カイが本を開けて指をさしながら、説明した。
「ほら、プラスってのは、数を足すって事だ。これは、６５と３２を足したら、いくつになるか、って問題だ。」
「お前、わかるのか？」
「もちろん。９７だ。」
「ど、どうしてそんな事がすぐわかる！」

「勉強したら誰でもわかるようになるよ。」
「どうしてこんなものが兵士になるのに必要なんだ！１００まで数えれて、２０くらいまでの数が計算できたら十分だろう！」
「何言ってるんだ、お前。普段の生活だって計算できた方が便利だろうが。だいたい、軍はものすごい数の人間や物資を扱うことになるんだ。数学なしには管理できない。」
ユージは青ざめだ。
「そ、そんな事、上の人間だけがやっていたらいいじゃないか。」
「この国では、誰もが上の人間になれる可能性がある。だから、誰もがやる必要があるんだ。」
ユージはそれを聞いて、目を丸くした。
「…そうか…そうだな…」
カイは思わずクスリと笑う。
「どうやら、明日からお前に数学の特訓をしなければいけないな。」
「…本当にやらなくちゃいけないのか？」
ユージは顔をしかめた。
「まぁ、そりゃ好きにすりゃあいいけどさ。でも、ネイル様はお前をいずれは正式に兵士にしようと思っているんじゃないかな。」
「俺を？この国の人間じゃないのに？」
「この国はこういう自由な国だからな。隣国からやってきて住み着いている人が結構沢山いるんだ。過去には王になったりしているものもいる。俺もお前みたいに優秀な兵士はうちの国に欲しい。」
ユージはその言葉がものすごくうれしかった。
「…そりゃ、兵士になれるなら、なりたいけど。俺はそれくらいしかできそうにないし。」
「なら、勉強しろ！ひょっとしたら次の試験を受けられるかもしれん。本当は学校に行かなくてはいけないが…お前は兵士だったんだし、特別処置をしてもらえるだろう。何せネイル様は前国王だ。そんなことを手配させるくらい朝飯前だ。」
カイがニヤリと笑う。ユージは驚いた。

…ネイル様は本当に俺のためにそんなことしてくれるのだろうか？
「けど、俺は監視下にあるんだろう？そんなに早く受けられるかな？」
「たぶん、大丈夫さ。監視下っていうけどさ、俺は世間体を保つためじゃなくて、ネイル様は、お前を自分のところへ置いておきたいだけだと思ってる。」
…そんな風に自分は本当に思われているのだろうか？
ユージはしばらく黙っていたが、しみじみと言った。
「俺、さっき、ネイル様が前王だってわかって、ものすごく怖いところに来たと思ったけど、ものすごくラッキーな場所にきたんだな。」
カイが噴き出す。
「ものすごく怖いところねぇ…。明日ネイル様とマーサー様に教えてやろうっと！」
「そ、そんなの言わなくていい！」
「ははは！まぁ、それはともかく。この国に身分が存在しないという意味が分かったか？そうやって王も能力で決めるから、王族が存在するはずがない。1代で終わるんだから。だから、この国の人間はみんな平等な人間だ。あるのは、優秀な人間に対する尊敬の念かな。」
「…そうなのか…。」
ユージはなんて国なんだろうと思った。だから、これだけの巨大な国を維持できているんだろかと思った。
「お前はリート国では、身分で苦労したんだろうが、これからは、お前は自分で自分の人生を切り開いていけるんだ。」
「…そうなんだな。信じられないけど。…近衛隊になれるならなってみたいや。」
「なれるだろ。ネイル様が剣の腕前は近衛隊でも通用するかもしれないって言ってたじゃないか。後は勉強するだけだ。」
…そういえば、そんな事をいってらしたな…

ユージは勉強さえ頑張れば本当になれるのかと思うと胸が高鳴った。
「…わかった。勉強、頑張ることにする。」
カイがふと時計をみた。
「もう12時すぎてる！すまん。明日朝早いのにな。」
「いいや。いろいろ、ありがとう。楽しかったよ。」
「じゃ、明日な。」
カイが笑って手をあげると、ユージの部屋から出て行った。ユージの顔には笑みがまだ残っていた。ユージはその日、興奮してなかなか寝付くことが出来なかった。

9話　狩り

４時２０分にセットした目覚まし時計がなった。
ユージは真っ暗な中、手探りで目覚まし時計を止め、もぞもぞとベッドから出た。服を着替え、弓矢と用意し、薬を入れた袋を腰にくくりつける。
部屋からでて下に降りると、もう、センがいた。
「おはよう。」
「おはようございます。」
「では、行くか。ついてきなさい。」
センについて家を出ると、左手を歩く。奥には厩舎があった。１３頭の馬がいた。一番端にユージがのってきた馬がいたので、その馬の元に行き優しくなでた。
「もう、疲れはとれたかい？」
馬はうれしそうにしっぽを振り、顔をユージにこすりつける。
…たった3日しか一緒にいなかったのに、そんなに俺の事が気に入ってくれたのかい？
ユージはこの馬が無性に愛おしくなった。
「何という名前だ？」
センはもう自分の馬にまたがっていた。
「名前は…この馬は自分のものではないから知らないんです。でも、名前がいるな。…リィにしよう。お前は今日からリィだ。いいかい？」
リィはまるでユージの言葉が分かるかのように、ユージの顔をなめた。
「うわぁ…やめろよ。でも、分かった。名前気に入ってくれたんだね。じゃ、リィ。これからよろしくな。」
センが言っていたように１０分で森についた。そのころにはあた

りは少し明るくなっていた。
「さあ、あとはお前の好きにするとよい。私は遠くからお前を見ているだけにしよう。」
「わかりました。」
ユージはゆっくり森の入り口へ近づいていった。すぐに鹿の群れを見つけた。静かにリィから降りる。
「リィ、ちょっとここで待っててね。」
ユージが小声でそう言うと、リィは少し鼻息をユージにかける。
ユージは、腰にぶらさげた袋に入っているしびれ薬を矢につけると、そっと身を低くしながら、鹿に近づいていった。木に隠れ、弓矢を持ちかまえると、ゆっくり木から身を乗り出し一頭の鹿に的を絞る。じっとそのまま動かずに待つ。あたりをキョロキョロ見ていたその鹿が下を向いて草を食べ始めた。その瞬間ユージは矢を放つ。矢が鹿の腹に刺さる。鹿が前足を上にあげて鳴いた。すぐに鹿が動かなくなる。ユージは鹿の元へ走った。そして、鹿の心臓を剣で一突きする。センの方に向いて手を振った。

「いやはや、まさかこれほど早く大物を仕留めるとは…」
センはただ唖然としてユージの元へやってくる。
「いえ、たまたまですよ。」
ユージが恥ずかしそうに手で頭をかく。
「そのしびれ薬はどれくらい持つのだ？」
「だいたい、１０分から１５分です。万が一人間に当たっても、しびれてしばらくは動けませんが、効き目がなくなった後の後遺症はまったくありません。」
「なるほどな…」
センは馬から降り紐を取ると、鹿の足を縛った。すると、ユージはまた何かに気がついた。
「すいません。ちょっと行ってきます。」
ユージはしばらく歩き立ち止ったかと思うと、すぐに矢を放つ。

それは、うさぎだった。うさぎを手にし、センの所まで戻ろうとした時に、ユージは上を見上げた。ウサギを地面に置くと、腰袋に入れていた石を取り、４個ほどほうりなげる。鳥が２羽落ちてきた。ユージはそれも手にしてセンのところへ戻った。
「今日は、このくらいでいいかな。もう帰りましょうか。」
「いや…まさかこれほどとは思わなかった。確かにこれなら、野営の時に重宝されるな。」
センがさらに唖然とした顔でユージを見ていた。ユージは頭をかきながら苦笑した。

ユージとセンが家に戻ったのは、まだ6時前だった。収穫した物を食堂にもっていくと、マーサーがあまりの早い帰宅に驚きながらユージたちを迎えた。
「これくらいあれば、２～３日持ちますか？」
「十分よ！余裕だわ！」
「よかった。毎日行くとさすがに動物たちが警戒してしまうから。またなくなりそうな頃に行きますね。」
「本当に、ありがとう。助かるわ。とりあえず、その隅に置いておいてもらえるかしら？ニーナたちが来たらみんなで処理するから。」
…ニーナたち？…あの３人の女中のことかな？
ユージはマーサーが一人で食事を作っているのをしばらく見ていた。
…朝は一人で作ってらっしゃるのか…それにしても、元王妃がこんな風に家事をしてるなんて信じられないな。それにこんな獲物に助かるなんて…ありあまるほどお金はあるだろうに。
センが鹿を言われたところに置いたのでユージもウサギを鳥をそこへ置く。
「では、私はこれで失礼する。また、朝食でな。」
センが食堂から出て行った。するとマーサーがユージに言った。
「広場でカイがランニングしているだろうから、一緒に走ってきた

らどうかしら？」
「そうですか。じゃあ、行ってきます。」
広場へ行くと、カイが黙々と走っていた。ユージはカイの走りに加わる。
「なんだ、もう帰ってきたのか？獲物はいなかったのか？」
「ううん。鹿1頭とうさぎ一羽に鳥を2羽しとめたよ。」
「はぁ？お前4時半に家を出たんだろ？じゃぁ、1時間ほどでそれだけしとめたってのか。」
「ああ。いつもそんなんだ。」
カイは肩を落とす。
「…お前のレベルになるには、程遠いな…」
「少しづつやれば大丈夫だよ。」
「…そうか？そうは思えんが、ま、努力はするかぁ。」
「ところで、こうやって毎日走ってるの？」
「ああ、実技試験で10キロ走ってのがあってな。タイムで点数が決まるからさ。早く走ろうと思ったら、いつも走ってないとかなりきついし、体力をつけるにもいいだろ。」
「ふーん。じゃぁ俺も一緒に走る。狩りに行くのは週2～3回にするつもりだから、その時は今日みたいに後から参加する。」
「おう。一人で走るのはつらいからうれしいぞ。」
しばらく走って、ユージたちは走るのをやめると、温泉へはいって汗を流した。7時が朝食の時間らしく、カイにせかされて食堂に入る。もうみんな席について待っていた。
ユージはちょっとどきどきしながらネイルに朝の挨拶をした。
「お疲れ様。じゃあ、食事にしましょうね。」
みんなすぐに食べ始めたが、ユージは手をつけずに、朝ごはんをじっと見る。できたてのパンにほかほかの卵焼き、ソーセージやサラダにジュース。朝食とは思えなかった。
「…それで、毎回こんなに食事が豪華なんだな…」
ユージは思わず思ったことを声に出してしまった。

「何が、それで、なのかしら？」
　マーサーが首をかしげる。ユージは焦った。
「いや…あの…昨日の晩、カイから聞いたんです。ネイル様が昔この国の王様だったって。ここに来てから、いつも豪華な食事で…だからやっぱり、王様はこんなすごい食事をしてるんだなって、思ったんです。」
マーサーが一瞬目を丸くしたが、すぐにうれしそうに笑いだした。
「あら、あら。本当にユージはうれしい事を言ってくれるわね！でも、残念だけど、これはこの国じゃ、普通なのよ。」
　カイがつづけて説明しだした。
「そうだ。農家も肉屋も仕立屋も、国民全員こんなモンだ。」
「ええ！！そうなのか？」
「ユージ。カイから聞いたろう。我が国には身分というものがない。だから、みんな同じような食事に同じような暮らしをしているのだ。私は昔王だったから、多少はよい暮らしをしておるが…。他の国の王や貴族は、これとは比べ物にならぬほど豪華な料理を食べているな。毎回食べきれぬほどの食事が並び、そして食べきれぬから捨てる。それに、着もしない豪華な服に、使いもせぬ食器、贅沢な家を建て、毎日パーティだ。ある程度は、それにも意味はあるのだが…そうして、国の金を浪費し、民にはゆき届かぬ。いや、やるつもりはないのかもしれぬな。この国がこんなに豊かなのは、そういうバカな事をする貴族や王がいないからでもある。」
　そうなのか…と感心していると、ネイルが咳払いしながら遠慮がちにマーサーにいった。
「もちろん、マーサー。お前の食事には満足しておるぞ。」
　それを聞いて、あわててカイとセンが同時に言った。
「私もです！」
「まぁ、本当にユージが来てくれて、うれしいわ。みんなようやく私のありがたさに気がついたようだから。」
「いや、だから、ずっとありがたく思っておったぞ。」

ネイルがそう言うと、カイとセンが必死に頷いた。
「はい、はい。ようやくわかりました！」
ユージはみんなのやりとりがおかしくてたまらず、思わずクスリと笑ってしまった。
すると、カイが不満そうな顔でユージに向き直った。
「お前、普通に接することができてるじゃないか。」
ユージは思わず飲んでいたジュースを噴き出しそうになった。
「何がなんだ？」
センが不思議そうに言う。
「昨日、ネイル様たちが何者かを話したら、びびりまくって、とてもじゃないけど、同じような態度でいられないって言ってました。あ～あ、また騙されたよ。」
カイはユージが青ざめた様子をマネしながら言った。
「カ、カイ…。そんな事、今、言わなくていいだろ！」
ユージはカイをにらみつける。
「いーや。今だから言ってるんだ。」
カイもユージをにらみつけ、二人は顔をくっつけたようになる。
そのやりとりに、今度はネイルたちが大笑いした。
「そう、ユージ。もう私は王でなないからな。私たちには、普通に目上のものに話すように話してくれればよい。今のような感じで十分だ。」
「は、はい。」
ユージが思わず背筋を正してしまった事は言うまでもない。

食事が終わるとネイルもセンもどこかへ出かけて行き、カイも学校へ行った。ユージは部屋へ戻ろうとすると、マーサーが言った。
「ユージ。一番玄関に近い部屋に、先日熊にやられた子がいるのよ。ご自宅はお仕事が忙しくて面倒が見れないから、うちで預かっているの。お礼がしたい、っていってたから、会ってやってくれるかしら？」

「あ、はい。わかりました。」
ユージは食堂を出て向いの部屋のドアをノックした。どうぞ、という声が聞こえたので、ユージが入ると、一人の少年がベッドからこちらを見ていた。しかし、ユージはその少年よりもその部屋の広さに目をむいた。
…な、なんだ…この部屋は！
よく見ると、椅子やテーブルが奥の方に詰めて置かれていた。
…会議室とか大人数のお客さんが来たときに対応する部屋なのかな…？
気がつくと、少年が痛みに顔をゆがめながら慌てて起き上がろうとしていた。
「そのまま寝ててください！」
慌ててユージは少年の元へかけよる。そう聞いて少年は体を横に戻す。
「…僕、フウっていいます。あの時は本当にありがとうございました。ユージさんがいなければ、僕だけでなく他にもたくさんやられたと思います。それに、お医者さんが、ユージさんの薬がなければ、僕はここまで持たなかったかもしれないって聞きました。本当に、どれだけ感謝しても足りません。」
フウが笑いながら言う。その笑い顔には幼さが見えた。ユージは自分より年下なのかな、と思った。
「フウさんが助かって本当によかったです。」
「ここで講師をされるって聞きました。弓矢だけなく剣の腕もすごいって。早く治って教えてもらうのが楽しみです。」
急にフウの目がキラキラとした。ユージはこれほどまでに自分が必要とされていると知ってなんだか嬉しいような恥ずかしいような変な気分だった。
「…私も楽しみにしてますよ。…ゆっくり休んで早く治してくださいね。」
「はい。」

ユージはそう言って、部屋を出た。

自分の部屋に戻り、机の上にある教科書を手に取ると、ベッドに寝ころがった。まず歴史の本を広げて読み見始める。

昨日カイが話してくれたことは、ごくごく一部だった。本には今までの王の名前やその業績や年号が事細かに書いてある。アイカ国は建国１２３８年とのことだった。

…こんな細かいことまで覚えなくちゃいけないのか？

ユージは頭が痛くなって、歴史の本を閉じ、昨日見てまだ自分になんとかなりそうな地学の本を選んだ。雲の様子や天気の変化、季節に見える星座のことなど結構知っている事が多かった。１時間半ほど読んでいたが、つかれてきたので本を閉じる。

…気分転換にリィに会いに行こうかな。

リィはユージが来るとうれしそうにしてくれた。ユージはリィに乗って広場の中を走る。リィは気持ちよさそうに走った。３０分くらいそうしてリィと遊んでいたが、また部屋に戻って地理の本を手に取る。アイカ国の地図が載っていた。その周りには近隣諸国の名前もある。リート国とアイカ国を比べると、アイカ国は１０倍ほどもありユージは改めてアイカ国の大きさに驚く。

…カイが国境だと言っていた川は、ハウゼ川という名前なのか。

アイカ国とソイ・モイ国との国境の山々はバーサルー山脈といい、川はそこから流れ、アイカ国と東にあるカルデ国とアイカ国の間を通り、アイカ国とリート国の間を通って、そのまま行くと海にいくらしい。

…この川がカルデ国との国境でもあるんだな。

ユージは朝早かったので、なんだか眠くなってきた。ちょっと休むか…と目を閉じた。

「ユージ！昼メシだぞ！」

ユージはあわてて飛び起きた。

「なんだ。熱心に勉強してるのかと思ったら、寝てたのか。」
カイがドアを開けて軽蔑したような顔でユージを見ていた。
「べ、勉強はしてたさ！でも、朝早かったから、眠くなってきて…さ、さっき寝たところだよ。」
「ふーん。」
疑いの目でカイが見ていた。
「ま、いいさ。とにかくメシだ！早く食べないとみんなが来ちまうぞ。」
「そ、そうなのか？」
ユージは急いでベッドからでてカイと一緒に食堂へ行った。
机には、またサンディがのっていた。昼はカイとマーサーとユージの3人だけだった。
「ネイル様とセンさんは？」
「あの二人なら、ネイルの弟の家に行って畑仕事を手伝ってるわ。」
「は、畑仕事？？？」
ユージはまたまた驚いた。
「そうなの。ネイルは元々農家の出身ですからね。そういうのをやってると落ち着くらしいわ。センは別に違う仕事をすればいいのに、自分はネイル様の秘書だから、と言って、一緒に畑をやってるのよ。笑っちゃうでしょう？」
「はぁ…そうなんですか。」
ユージは二人が農作業をしている姿を思い描こうとしたが、どうしても思い描けなかった。仮にも昔王だった人間がリート国で言えば最下層の階級のする仕事をするなんてとても考えられなかったからだ。
「俺のオヤジも農家の出身さ。王をやめたら、ネイル様みたいに畑をするって、言ってるぜ。」
ユージはしばし言葉を失う。
「…なんだか、やっぱりしっくりこないなぁ…マーサー様だって、女中さんたちに手伝ってもらっているとはいえ、この家の家事をご

自分でやってらっしゃるし…元王妃なのに…」
「あら。ユージ。この国の王妃はただの飾りなのよ。この国のトップは王だけなの。たまに優秀な王妃がいて王と共に国政にかかわったりするけど、ほとんどが、その辺の主婦と変わらないわ。普通に食事をつくって掃除して、子育てして。王妃としての仕事と言えば、隣国の要人を招いて数年に1度あるかないパーティをするだけね。それもみんなが手伝ってくれるから、綺麗な服を着て笑ってるだけでいいの。だから、誰でもできるわ。それからね、こういう話は他国の人間には内緒だから覚えておいてね。だって、そうでしょう？相手の国に、この国の王が貴族でも王族でもなんでもない、農家の出身だと知られたら、なめられてしまうわ。だから、アイカ国では他国から住み着いた人間には信用がおけるまでずいぶん長いこと黙っているのよ。それが自分たちの国を守ることでもあるから。」
「じゃあ、どうして私にそのようなお話を？」
「それはね、私たちみんな、もうあなたを信用しているからよ。それに、あなたは監視下にあるのよ。一人で出歩けないのに、どうやってその話をいいふらすのかしら？」
言われてみればその通りだった。
突然外が騒がしくなった。誰かが大声で叫んでいるみたいだった。
「あいつら、もうやってきたな。マーサー様。ごちそうさまでした！ユージ、さあ行こうぜ。」
「ああ。ごちそうさまでした。」

１０話　訓練

二人が急いで広場へ行くと、もうみんな揃っていた。
「よし！全員そろってるな！みんな、ちょっと並べ！」
みんなカイの言う事をよく聞き、整列する。
…カイがみんなのリーダーなんだな。
「改めて紹介する。俺の隣にいるのがユージだ。これから、しばらく俺たちの指導をしてくれることになった！みな、挨拶だ！」
すると、みなが大声で、
「よろしくお願いします！」
と言った。ユージはたじろいだが、
「ユージです。これからよろしくお願いします。」
と挨拶した。
「試験は１６歳にならんと受けれんと言ったな？正しくは、試験の１か月前の試験の申し込日に１６歳になってるやつだけが受けれる。この中で、今度の試験を受ける資格があるのは、俺とこの、ミン、キース、マーフィの４人だ。みんな同い年だ。一応、今度の試験をみんな受けるつもりでいる。」
ミンとキースとマーフィが笑って頭を軽く下げる。
「けど、みんな同じように訓練してくれればいい。…じゃあ、これからどうしたらいい？俺達。」
「そうだな…とりあえず、ネーチェから普段やってるようにやってくれるかい？しばらく様子を見てみたい。」
「わかった。」
カイたちは倉庫からネーチェの棒を出し、白い服を着ると、それぞれペアになって組み合いをはじめた。ユージはそれを１０分ほど見ていたが、やがてみんなをやめさせた。
「カイ。ちょっと聞きたいんだけど。」
「なんだ？」

「試験の時は、これじゃなくて、試験用の剣でやるんだよね？」
「ああ。」
「その時もこの白い服を着るのか？」
「いいや。」
「じゃあ、どうやって点数を決めるんだ？ルールはあるのか？」
「試験官が、動きや相手を倒した時間、その技なんかで決めるらしい。ルールは相手の急所さえ避ければＯＫだ。」
「そうか。わかった。」
ユージはみんなに向きなおると言った。
「みんなの弱点が分かった。ネーチェにこだわりすぎている。」
「こだわりすぎているとは？」
カイが言った。
「服に黒い汚れがつけば気持ちがいい。だから、汚れをたくさんつけてやろうと思う。だから、棒を振り回し動きがどうしても大きくなる。けど、本当の戦いでそんな大きな動きをすれば、逆に隙を作ってやられてしまうことになる。だから、動きは最小限にしなければいけない。それに、剣ではほんの少し傷つけるだけで十分だ。そうすれば、痛みで相手が一瞬ひるむ。そこをつくんだ。…もっとも、優秀な兵士はそれくらいでひるまないが。それから、みんな相手をやっつける事だけを考えている。それで自分がやられてしまっては意味がない。少しでも傷つけられないように、もっと必死で逃げなければ。これは、ただの棒だ。けれども、本当の剣だと思い込む必要がある。」
みんなは、静まり返って聞いていた。
「お前は本物の剣でやりあったことあるのか？」
カイが聞いた。
「ああ。昨日風呂に入ったときは、もう暗くなってたからみんな気がつかなかったんだな。」
そう言うとユージは自分の服をまくりあげた。腹も背中も傷だらけだった。それを見てみんな驚いてざわめいた。

「リート国では訓練でも真剣を使う。だから、訓練中でも怪我はつきものだ。誤って死亡事故がおきるなんて事も、しょっちゅうだ。」
カイは昨日、ユージは殺されたくなければ、相手を殺すしかないと平然の言っていたのを思い出した。
「だから、昨日ネイル様ともあんなに冷静にやりあえたんだ。訓練用の剣とはいえ、マスクも防護服もつけずにやりあうなんて…って、怖くて仕方がなかったけど。」
マーフィが言った。
…そういえば、昨日そんな事言ってたな。
「マスクに防護服って？」
ユージはカイを見た。
「試験用の剣で試合を行う時は、事故防止のためにマスクと防護服の着用が義務付けられている。もっとも、兵士になったら普通に訓練でも着用する。ネーチェの大会でも着用するが。」
「なぜ、それを使用しない。」
「まぁ、ただの訓練だし…それに今は夏で暑いからな。」
ユージの顔が急に怖い顔になった。
「…今からマスクと防護服を着用しろ。」
恐ろしく低い声でユージが言う。あまりのユージの怖さに、慌ててみんな倉庫にマスクと防護服を取りに行き着用した。
「カイ。その棒で俺を思いきり殴り倒すつもりで来い！」
カイはユージの真剣な顔にひるむ。
「お前はマスクと防護服つけないのか。」
「いらない。」
カイはためらいながら、棒を持って構えた。ユージも構える。カイがものすごい勢いでかかってきた。ユージがよける。カイの右腕を狙おうとする。カイは右腕をすばやくしたにおろし、転がる。ユージがカイをおいかけて、上から棒を振り上げる。カイが必死になって転がって逃げる。ユージは少しふらついた。その隙にカイが立ちあがり、ユージを狙う。するとユージは頭を下げ、左腕で思い切

りカイを叩いた。カイはそのまま後ろに倒された。ユージはその上におおいかぶさり、カイののどめがけて棒をつきさそうとする。

やられる！！

カイは思わず、身を固くして、目を閉じた。しかし、棒はのどには当たらなかった。しばらくして恐る恐る目を開ける。棒はカイののど元の寸前で止まっていた。ユージはものすごい形相でカイを見ていた。カイはそのまま固まったように動けなかった。

…殺されそうだとはこういう事なのか。

ユージが棒をカイののど元からはずし、立ち上がった。カイもおずおずと立ち上がりマスクを取る。

「わかったか。相手をやっつけるには、別に墨をつける必要はない。相手を倒せばそれでいいんだ。それにお前、マスクと防護服つけていたから、余裕があったろ。」

「あ、ああ。」

「だから、大胆に俺にかかってこれた。昨日とは別人だったよ。」

ユージがニコリと笑って言ったので、カイは思わず笑顔になる。

「さぁ、これから、みんな同じように真剣を持っていて、相手を何がなんでも倒すつもりでやるんだ。ルールは急所をさけるだけなんだ。つまり、それ以外は、どんなに卑怯な手をつかってもいいということだ。蹴ったり、棒をはたいたり。」

すると、それを聞いていたマーフィが答えた。

「確かにネーチェの大会では、みんなそうやってる。」

「なら、大会で見たような技も使ってみるんだ。後、ペアはどうも、気の合うもの同士で組んでいるようだが、それでは上達しない。自分と同じくらいのレベル同士で組むんだ。それはわかるか？」

みんなが頷く。

「じゃあ、それでペアを組んで、組み合いを続けてくれ。」

それぞれ、ペアを変えて戦いはじめた。ユージはそれを見ながら、

一人一人注意したり、ペアの組み合わせを変えたりした。３０分も続けるとみんなヘトヘトで座り込んでしまった。カイだけが、多少はしんどそうにしていたが、そのまま立っていた。
「なんだ、もうみんなダウンなのか？みんな、体力がなさすぎるぞ。」
みんな、声にならないを出した。
「…カイ、試験の体力測定には、腹筋や背筋などもあると言っていたな？」
「ああ。」
「じゃ、それも、これからもっとやるんだ。今までの3倍はしろ！それに足腰も弱い。もっと走りこまねば。みんな、体力測定の分野は、最低カイのレベルになるように努力するように。」
「ええ～～。カイのレベルって…試験じゃ満点レベルだって、センさんが言ってたよ。」
ミンが情けない声で言った。
「そうなのか？」
ユージが驚いてカイに聞いた。
「ああ。俺は剣も弓術も馬術も自信がないから、体力測定で点をかせごうと思ってさ。」
「ふーん。じゃ、みんな満点を目指せ。」
全員が不満の声をあげた。
「合格したくないなら、好きにすればいい。」
と、ユージが言うとみな黙りこくった。
「あと、剣では瞬発力が必要だ。それには、長距離ではなく、短距離ももっと練習しなくてはいけない。しばらく休憩したら行う。」
休憩はほんの１０分ほどだった。ユージはみなを2列に並べて、２０m走をさせた。１組がゴールにたどり着いたら、次の組が出発し、その繰り返し。ゴールにたどり着いたら、すぐにスタートに戻って、順番を待つ。それにはユージも加わった。延々と1時間ほど繰り返した。ユージだけが最初から最後まで同じ速さで走った。途

中でかなりスピードが落ちたもののカイはなんとか走っていたが、それ以外は最後の方は走っているのか歩いているのか分からない状態となった。
　終了すると、さすがのカイも地面にあおむけになって寝ころんだ。ユージだけが、肩で息はしていたが平然と立っていた。それを見てカイが言った。
「お前…なんだ、その体力…」
「何いってんだ。リート国じゃ、こんなの普通だぞ。もっと厳しい訓練もさせられた。もっとも、それは訓練じゃなくって、いじめだったんだけど。」
　カイはユージを見上げた。そしてまじまじと見た。大勢の兵士の中でみなによってかかっていじめられているユージを想像した。…なんて自分は甘かったんだ。ここや学校にいる連中の中で一番上手だとひそかに自慢に思っていたが、同じ穴のムジナだったのか…
「じゃ、次は弓矢だ。」
「ええ？休憩なし？」
みんなが驚いた。
「順番でやるんだから、まっている間に休憩できるだろう。」
　ユージがさっさと的の方へ歩いて行ったので、みんなは体にムチを打ってユージについていった。それでもユージはみんなをちょっとは休憩させてやろうと、ユージだけで弓矢を用意し、弓矢をじっくり見て、いくつか選んだ。そして、みんなに言う。
「まず、半分の位置からはじめる。」
　みんな疲すぎていて返事もできなかった。
「カイ、とりあえずやってみて。」
　カイが弓矢を構え矢を放つ。的の上の端にあたった。みんなパラパラと拍手した。
「矢を持ってちょっと構えてみて。」
　とユージが言ったので、カイは構えた。
「ほら、背筋が曲がってる。だから、矢もそれるんだ。背筋はまっ

すぐ。それに変なところに力入っている。なんでもそうだけど、必要なところ以外は力を抜くように。今のこの姿勢を覚えろ。」
カイは頷いた。
「じゃ、そのまま矢を放せ。」
カイはそのまま、ポーンと矢を楽に放した。すると、矢がど真ん中に刺さった。疲れてうつろだったみんなの目がとたんき輝き歓声をあげた。
「とにかく、弓矢の基本は、まず姿勢だ。そして、まっすぐに矢を射抜く感覚を身につけるんだ。俺が選んだ弓矢はくせがない。だから、きちんとやれば、かならず中心を射ぬけるはずだ。一人づつ順番にならんで。一人一人直接指導する。」
それを聞いて、みんな我をも先に並ぶ。最初に並んだのは、あの唯一の女性だった。
彼女が構えたところで、ユージは姿勢のチェックをする。
彼女が、矢を放つ。すいこまれるように的の中心に矢があたった。
彼女は大喜びで飛び跳ねた。

そうやって、順番にユージが指導すると全員が的の中心にあてることができた。
2回転したところで、ユージはみんなに言った。
「では、これからしばらく、今俺が言ったことを思い出しながら、分かれて練習しろ。」
的は3つあったので、みんな分かれて練習した。その間、みんなをみながら、気になった人だけをユージは注意したが、ほとんど見ていただけだった。みんな的には当たるものの、中心には当てられなかった。1時間ほどすると、ユージはやめさせた。
「まぁ、最初はこんなもんだろう。明日からは同じような感じでやる。学校以外では、俺がいいというまで、絶対これ以上遠くからはやるな。わかったか？」
みんな元気よく返事した。

「じゃ、広場を１０周走って終わる。」
「ええ～～！また走るの？もうヘトヘトだよ～～。」
みんなが口ぐちに言った。
だが、ユージが怖い顔でみんなをにらんで走り出したのでみんな黙ってユージについて走り出した。

訓練が終わった後は、みんなで昨日と同じように温泉につかった。するとみんな今度はユージの体をこぞって見にきた。
「ほんとに傷だらけだな。」
ミンが言った。
カイがユージの腕を触る。
「しっかし、お前、すごい筋肉だな…まったく贅肉というものがない。」
「ちょっと！カイ！触るのやめてくれ！こんな体になりたいんだったら、今日の訓練をやってればそのうちなるよ。」
「ほんとか！！！」
みんなが顔を乗り出して聞いた。
「ああ、たぶん…」
「よーーーし！明日からもっと頑張るぞーーー！」
マーフィが大声で叫んだ。みんな、こぶしを上に突き出し、おおおおーーー！と答えた。　ユージはみんなの異常な熱に圧倒されどうしてよいか分からず困った。
風呂に上がって、またみんなを門まで送って行くと、例のただ一人の女性が言った。
「なんだか、すごくお風呂で盛り上がってたわね。なんだか、うらやましいな。誰か女の子が来ないかなぁ…いつも私は一人で入ってるんだもの。」
「なんだよ。だったら、ジェッシーも俺たちと入ったらいいじゃないか。俺たちみんな大歓迎だぜ！」
キースが言った。すると、ジェッシーが顔を真っ赤にした。

「な、何よ！！！本当に、私が乗り込んでいったら、驚くのはそっちの方じゃないの？」
全員が思わぬ攻撃に真っ赤になって黙りこくった。
「ふん！みんな！帰るわよっ！」
ジェッシーがつんとして歩きだすと、みんな慌ててついていった。門から出るときにジェッシーがちらっとユージとカイを振り返り、舌を出して笑いながら手を振る。
ユージとカイは慌てて手を振りかえした。
「…あの子、ジェッシーっていうのかい？かわいい子だな。あんな子も兵士になるんて驚きだ。」
「そうだろう？…めちゃくちゃかわいいからさ、俺たちみんなのアイドルなんだ。」

夕食の時間、カイはずっと今日の訓練の話を一人でネイルたちに詳しく話して聞かせた。　ユージは恥ずかしくて聞いてないふりをして、黙々と食べた。
「とにかく、ユージときたら、とんでもなく厳しいんです！あれを経験したら学校なんか屁です！ネイル様やセンの訓練ですら足もとにも及びません！」
「ほぉ、そんなに厳しいのか。みんなよくついてたな。」
ネイルが感心していった。
「ネイル様やセンだと、上手で当たり前だと思いますが、ユージは俺達とほとんど年が変わりません。だから、ユージほどではないにしろ、自分たちにもなんだかできるような気がするんです！それにユージはものすごく教えるのがうまいんです。ユージの言う通りにやって、的の中心を射たときは感動したぞ！」
カイが興奮してユージの顔を見て言った。
「いやはや、お前はどれだけ私たちを驚かせたら気が済むのかね。」
ネイルがうれしそうな顔を自分を見つめる。マーサーもセンもだった。

「いや…あの…」
ユージは頭をかきながらそういっただけだった。ここで、大したことないとか、なんとか言うと、カイにぶん殴られるに違いなかった。
「とにかく、厳しかった！！！ヘトヘトだ！夕食が終わったら、仕返ししてやる！今度は俺がお前を教える番だ！覚えとけ！」
そうだ！今日の夜から勉強を教えてもらうんだった！すっかり忘れてた！
ユージはカイに厳しく訓練したことを後悔した。

夕食が終わり、カイはユージの部屋に来ていた。
「お前、実技試験ではほぼ満点がとれそうだな。」
「じゃあ、あと１００点で合格できるんだ。」
「何いってるんだ。俺達が目指すのは、１等兵だぜ。」
「ええ？いきなり１等兵？そんなの無理だよ！」
「無理なもんか。だいたいお前なんか、ネイル様に近衛隊でも通用するかもしれないって言われたクセに、１等兵目指さなくてどうする。」
「…でも、実技はいけても、勉強がさぁ…」
「とにかく、俺は今度の試験で合格してたぶん１等兵になる。」
「どうして、そんなに自信たっぷりなんだ？」
「俺は筆記試験は得意だからな。この間過去の問題やってみたら、全教科満点だった。だから、俺は実技で足を切られないようにさえすれば合格だ。体力測定でも満点だとすると、あとたった２００点だからな。余裕で１等兵になれる。」
ユージはそれを聞いてむっとした。
「そんな考えだから、剣も弓矢も上達しないんだ！」
カイがニヤリと笑う。
「その言葉、そっくりお前にかえすぞ。」
ユージはしまったと青ざめた。

「…けど、筆記で満点だなんて、どうしてそんなことがわかるんだ？」
「ネイル様の家の図書室には、過去の問題がそろってるんだ。好きに見ることができる。みんながここに来るのはそういう理由もある。他にもたくさん本もあるしな。」
「へぇ…そうなのか。」
「だからな、お前も1等兵を目指せ！わかったな！」
「う、うん。」
ユージは急に心細くなってきた。
「でも、まぁ、可能性は十分あるぞ。まだ、3か月もあるからな。筆記試験で３００点も取れば余裕だ。医学と地学はなんとかなりそうだと言っていたな。これで、８０点づつとるとして…他の3教科でそれぞれ５０点もとれば大丈夫だ！ま、もっともこれはこれで、お前には満点をめざしてもらう。」
「分かった…」
としぶしぶ返事するしかユージにはできなかった。

まず数学からカイは教え始めた。教えるというより、はじめは計算式の表を渡され、それを覚えさせられただけだった。とりあえず、２０までの足し算だった。そのあとはひたすら、カイが問題を言って、ユージはそれに答えるだけだった。さすがに1時間もすれば、すらすら言えるようになった。
「よし、今日は終わりだ。明日は引き算もやる。」
ユージはどっと疲れて机に伏せる。
「お前、歴史と地理は本を読んだと言っていたな。どのへんをやった？」
「ほんの初めの方だよ。」
「じゃ、アイカ国が建国される前の、元の大きな国の名を何ていう？」
「ええと…確か…何だったかな。」

「じゃ、アイカ国が建国されたのは何年前？」
「ええと…１２…」
「…やっぱりな。じゃ、次、地理。お前と出会った川。あれは国境だと言ったが、何という。」
「…」
カイがじろっとユージを見た。
「お前、ただ読んだだけだろう。」
「う、うん。」
「それで覚えれるか！何度も何度も暗唱するんだ。そして指書きする。」
「指書き？紙に書かないのか？」
「紙に書いた方がいいんだけど、もったいないから使わない。たまにきちんと書けるか確認に使うくらいで十分だ。」
「わかった。」
「…ちょっと待ってろ。」
カイが突然部屋から出て行ったかと思うと、本を４冊もって戻ってきた。
「これ、俺の教科書だ。やる。」
ユージがそれを手にすると、カイが言った。
「それ、開けてみろ。」
ユージは開けてみてびっくりした。教科書にいくつも線が引いてあったからだ。数学にいたっては、何やら丁寧に解き方がかいてあった。
「試験って、重要なところしか出ないんだ。王の名前も全部覚える必要はない。さすがにそんな事は俺もできない。何か記録を残したとか、改革をしたとか、そういう王が質問にされる。地理も医学も地学もほとんど毎回同じ問題だ。その重要なところに線が引いてある。そこだけを覚えろ。毎日歴史は３ページづつ、地理は１ページでいい。それを午前中に覚えるんだ。それを俺は夜にテストする。そして、土日に１週間分をまとめて復習のテストをする。医学と地

学は大丈夫そうだと言っていたから、普段は自分でやれ。これは２ページづつでいい。これも土日にテストをするがな。わかったか？」
「う、うん。」
カイの教科書を見て、どれだけカイが努力をしていたのかが分かった。過去問題で満点だという話もうなずけた。
「で、でも、これいいの？いくら満点でもさ。」
ユージは、カイの教科書を持ってカイに言った。
「ああ。俺は近衛隊の教科書で勉強してるからもういらないんだ。」
ユージは目を丸くした。
「とにかくな、数学って、できるようになるまで、結構時間がかかるんだ。おれはさっき５０点と言ったが、最悪数学は２０点でもいい。他の教科はわりと短期間でできるようになるから、それをしっかりやるようにすれば、１等兵になれると思うぜ。」
「じゃ、数学やらずに他の教科だけやった方がよくない？」
「数学やるとさ、頭の回転が良くなるんだ。」
カイが右手で頭を指差していった。
「頭の回転？」
「そう。物事をすばやく考えたり、早く理解したり。集中力もつく。だから、今度は点をとれないかもしれないけど、頭のトレーニングだと思ってやってくれ。まぁ、しばらくは俺がつきっきりでやるから、今は、一人でやる必要はない。」
「分かった…。なんだか、いけそうな気がしてきた。」
「だろ？じゃ、もう１０時だし、もう寝る。今日、俺へトへト。」
「うん。そうだ！いつも何時に起きて走っているんだ？」
「５時半に起きてる。」
「分かった。じゃ、また明日。」
カイはあくびをしながらユージの部屋を出て行った。
カイが出て行くと、ユージも大きなあくびが出た。
…今朝、早かったもんな。…俺ももう寝よう…
ユージはベットにもぐると灯りを消した。

11話　入隊試験

それから、ユージは、本当に毎日慌しい生活を続けた。そして、あっという間に1ヶ月がたつ。すると、このネイルの館である変化が起こりはじめた。若者がぽつぽつ増えだしたのだ。1か月半を超えるころには30名近くになった。

「どうしてこんなに増えてきたんだ？」

「あのな。ここで訓練している全員が、学校でみるみるうちに腕をあげ、トップの成績をあげるようになったんだ。みんなさ、お前のおかげだと触れまわってるんだ。だからさ。」

「…そうだったのか。」

ユージはみんながそんなに学校で成績があがっていたたのかと、胸がジーンときた。

「しかも、なんだか知らないけど、馬術までできるようになったぞ。たぶん、体力がついてきたからだと思う。」

「へぇ…そんな事ってあるんだ。」

それはユージにも驚きだった。

「でさ、今度の試験でみんなそろって1等兵になりそうな気がしてきた。みんな、家じゃ家族がうるさくて勉強に集中できないといって、朝早く学校に行って勉強するようになった。それがどうもよかったらしい。筆記のミニテストでも軒並みんな高得点を出してさ。授業も真剣に聞くようになって、先生に質問しまくってる。先生もびっくりさ。」

「…俺も、もし試験が受けれたらみんなと一緒に1等兵になりたいから、勉強頑張ろうっと。」

「そうだな。みんなで1等兵になれたらいいな。」

そうして、さらに2か月がたったある日の夜、ユージはネイルに

呼ばれた。
「ユージ、喜べ。次の試験、受けられることになったぞ。実はな、昨日訓練学校の校長が見学に来ていたのだ。ユージの実力を見て驚いておったぞ。」
「ほ、本当ですか？」
ユージはうれしくて泣きそうになった。
「そうだ。それに、これだけ短期間の間に、これほど生徒を上達させることは、今まで誰もできんかったからな。学校の講師よりお前の方が上だな。」
ネイルは自分のことのように自慢げに大笑いした。
「だから、今度のお前の試験を期待しておるぞ！試験に合格すれば、お前の監視もなしだ。晴れて自由の身となる。」
「わかりました！ありがとうございます！絶対１等兵になれるように頑張ります！」
ユージははちきれんばかりの笑顔でネイルにそう言うと、急いで部屋にいるカイの元へ走った。
「カイ！今度の試験受けられるってさ！！昨日訓練学校の校長が見に来てたんだって！」
「そうか！よかったな！！」
カイの顔もぱっと輝く。
ユージはこの日から今まで以上に勉強に励むようになった。

その週の土曜日、カイに言われてユージは筆記試験の時と同じように時間を計って、過去の問題をやってみた。最後の数学はさっぱりで、早めに切り上げ、訓練を取りきっているカイの所へいく。
「なんだ、お前、えらく早いじゃないか。」
さっぱり数学がわからなかったというと、大笑いしてユージと交代し、答え合わせに行った。しばらくするとカイが大急ぎで戻ってくる。笑顔だった。
「おーーい！！すごいぞ！！！３４７点だ！！！これなら、余裕で

１等兵だぞ！」
「ほ、本当に、そんなにとれていたのか？」
みんなが自然と集まる。
「ああ、歴史６７点、地理７３点、地学８９点、医学９４点、数学２４点の計３４７点だ。」
ユージは数学の点を聞いてガクっとする。
「そうかぁ…やっぱり数学、そんな点かぁ…」
「でも、これならまだ１カ月あるし、ひょっとしたら数学以外は満点を狙えるかもしれない！こうなったらお前、首席を狙え！」
「しゅ、首席？」
「トップ合格だ。この町の訓練学校のトップじゃないぞ。アイカ国入隊試験受験者全員の中でのトップだ！９００点を超えることが出来たら、それも夢じゃない。さっきの点数に実技の点数を足してみろ。馬術がどれくらいできるのか分からないが、少なくても４５０点は可能だろう。すでに７９７点だ。あと１００点なら、十分射程圏内だ。」
それを聞くとみんなが目を輝かせて拍手をした。ユージの気持ちも大きく膨らむ。
「ま、俺も首席狙ってるからな。お前には負けんぞ！」
カイがそういうとみんなが、カイらしいと大笑いした。

ひょっとしたら首席になれるかもしれないとカイから聞いてから、ユージは数学を急にやる気になり、勉強の時間の半分は数学をやるようになった。
やがて２週間前になると、入隊試験を受けるものは筆記試験の勉強に集中したいといって、３時になると帰るようになった。試験を受けるのは全員ではなかったが、１１月も深くなりさすがに寒さが増してきたためか、みんな一緒に帰って行った。はじめからここにいたメンバーだけが残って暗くなるまで訓練をつづけた。

そして、試験から1週間前の日曜日の昼、ユージはリィに乗って、カイと訓練学校に来ていた。
馬術の試験の会場を見学したいと学校側に申し入れていたのだ。学校について校長に挨拶すると校長は、
「見学だけじゃなくて練習もぜひして行きなさい。」
と言ってくれたので、遠慮なく練習させてもらうことにした。

会場には、ポールや柵が何個もあった。カイがまず手本を見せる。ポールを交互に通り、柵でジャンプしてクリアする。
「じゃ、お前、好きなだけ練習しろ。」
カイに言われて、ユージはリィを走らせる。
はじめは、なかなか上手くいかなかったが、1時間も練習すると、難なくできるようになった。
「…お前、馬術も満点だな。」
カイがうれしいような呆れたような顔で言う。
「そうだとうれしいな。じゃ、俺は実技で満点めざすよ。」

そうして、最後の日曜日がやってきた。　その日は訓練も勉強も休みにした。
昼にネイルの館のメンバーを呼んで、明日の試験の壮行会をやった。それには、熊に襲われて大けがをしたフウもやってきた。
彼は怪我をしてから1か月ほどで家に戻っていったが、その後まったく姿を見せないので、ユージはずっと心配していた。なので、元気そうな彼の姿を見てほっとした。
食事は今まで見たこともないくらい豪華だった。ユージはこれが本当に豪華というものか、と思った。
最後に明日試験を受ける5人が立ちあがって目標を一人づつ言いあう事になった。
「筆記試験を満点。実技試験で４００点の計９００点を目指して、首席を狙います！」

カイが自信満々の顔で言うと、みんな、その顔を見てカイらしいとこっそり笑った。
次はミンだ。
「なんとか2等兵を狙います。」
今度はキースが立ち上がる。
「俺も2等兵を目指します。」
そして、マーフィも立ち上がり、小さな声で
「はじめは、とりあえず合格したらいいと思ってたけど…3等兵を目指します。」
と言う。
すると、カイがものすごい形相で怒りだした。
「何いってんだ！お前ら！十分1等兵が狙えるだろ！俺たち全員、1等兵が目標だ！わかったか！」
「わ、わかった。1等兵目指すことにする。」
3人はカイの剣幕にたじたじになる。
一方それを聞いてユージはため息をついた。
「…カイ、先に言わないでくれよ。」
「す、すまん。じゃ、次ユージ。」
カイは照れて咳払いをしながらいった。
ユージは立ち上がり背筋を正す。
「俺も1等兵が目標です。実技で満点、筆記試験で４００点の９００点以上を目指して、カイを押さえて首席になります！」
「なんだと！俺が一番だ！」
カイが立ち上がって怖い顔でユージをにらみつけた。
「何だよ。首席を目指せって言ったのお前じゃないか。」
「そうだけど、なんだか腹が立つ。」
ユージはカイのわがままぶりに頭が痛くなった。
「ユージ、カイなんか、まともに相手にしてたら、無駄にエネルギー使うだけよ。ほっといたらいいのよ。」
ジェッシーだった。ユージを見てニヤリとしている。

あまりにも的確な意見に思わずユージは噴出してしまった。すると、みんなもその通りだと言って大笑いし始める。カイ一人がしばらくふてくされていたが、そのうちみんなと笑いだした。

次の日の月曜日がやってきた。

筆記試験の日だ。

朝８時に家を出て、歩いて学校へ行った。８時半前に学校につくと、１００人近くの人がいた。ユージはその様子に目を丸くする。

「こ、こんなに受けるのか？」

「ああ、前にもいったろ？筆記試験だけを受けるやつもいるからな。明日の実技になったらガクッと人数が少なくなるよ。確か、１７名だって聞いた。今回は少ないんだ。普段は４０名くらいはいるんだけど。」

すると遠くの方で誰かが笑顔でユージとカイに手を振っているのを見つけた。

ミン、キース、マーフィだった。すぐに、二人は3人の所へいった。

「あ～～、俺、昨日緊張してなかなか眠れなかったよ～～～。」

キースが青い顔で言う。

「俺も。」

と、ミンとマーフィ。

「なんだ、お前らなさけないな！俺はいつも通りぐっすりだよ！な、ユージもだろ？」

「いや、俺だってなかなか寝れなかったよ。数学が心配で心配で…」

「…さすがだな。カイ。ぐっすりだなんてさ。」

キースが呆れたような尊敬するような複雑な顔を見せる。

そのまま、５人である事ない事を話あった。みんな、緊張しているのか饒舌になっていた。

そうこうしている間に、教室が空けられ受験生は受験番号順に教室へと入って行く。４つの部屋に分かれていたが、５人とも同じ部

屋だった。
教室に入って席に座る。机には紙が置いてあった。あたりは静まり返り、ただ試験が開始されるのをまった。ユージはこの時間が一番長く感じた。

やがて、試験官が５人ほど入ってきて、所定の位置につく。一人が前の席で、他の４人は教室の隅の席だった。４人は監視役だった。

試験が始まった。

まず、歴史だった。前に座っている試験官が問題を読み上げる。ユージはその答えをひたすら書いていった。部屋にはペンを走らせる音と、試験官の声だけがする。
そして歴史が終わり、地理・地学が行われた。

昼食の休憩になる。
５人で集まって、紙にくるんで持ってきたサンディを食べた。カイ以外は試験の出来に自信がなく無口だった。カイ一人だけが笑顔満面でにこやかに一人で話していた。

すぐに昼の部が始まり、医学・数学に挑む。ユージは最後の数学にどきどきしたが、カイに言われた通り、難しい問題は捨てて、自分にできそうな問題だけをしっかりやった。

「では、終了。」
試験管のその一言を聞くと、みんなため息をついてペンを置いた。

５人はそろって、ネイルの館へ戻った。
マーサーがお茶とお菓子を用意してくれた。みんな疲れていたので、無口でお菓子をほおばる。

「みんな、どうだったの？」
マーサーがいつもの笑顔で聞いた。
「…まったく、自信ないです」
ユージが暗い顔でそう言う。
「おい、おい、そんな情けないこと言うなよ！」
「…俺だってそうさ。自信満々なのは、カイだけだ。」
キースがぼそっと言った。妙な沈黙が走る。
「ふふふ。考えるだけ不安になるから、みんな軽く運動してらっしゃい。体を動かせば、つかれて夜は何も考えずに寝れるわよ。」
マーサーがそう言ったので、５人は広場へ向かった。
他のメンバー８人がネーチェをやっていた。５人を認めると、集まってきて試験のことを聞いてきた。大まかに話を終わると、やがてみんなで走り出す。
走りながらユージがカイに聞いた。
「なあ。試験が終わった後は、学校はどうなるんだ？」
「１か月間休みさ。その間、学校側は、試験の丸付けをしたり、新入隊員の配属を決めたり、講師が休暇をとったりするからな。昼から通常通り兵士が練習してるだけだ。だから、１月の１０日から授業が始まるまで休みさ。」
「ふーん。みんなはこれからどうするの？ここにはもう来ないの？」
「家の手伝いをしたり、ここに来たり、それぞれさ。」
「じゃぁ、俺はもうお役御免なのか？」
とユージが言うとミンが大声で言った。
「そんなのヤダよ！ユージが兵士として配属されるまで、続けてくれよ！」
「…そうだな。せっかくここまでみんなレベルが上がったんだ。ここでやめちまうと、体がにぶっちまう。続けてやろうぜ。」
カイもそう言った。
「そうか…」
ユージはちょっと考えた。

「じゃあ、午前中は馬で遠出しないか？それに、狩りの練習もしよう。石投げのコツも教えてやる。で、午後からいつもどおりの訓練をする。」
「賛成！」
みんな口ぐちに言った。ユージは、まだしばらく、みんなとこうやって過ごせるんだ、と思うとうれしかった。

次の日になった。いよいよ実技試験の日だ。
学校へ行くと、カイが言っていたように、人が少なくなっていた。試験の開始は１０時からで、それまでの間、それぞれ準備運動をしたり、馬術や弓術やネーチェをしながら待機した。ユージたち５人は何をやっても注目の的で、チラチラとみんなが見られ、なんだか５人ともいい気分になった。
やがて、１０時になり、体力測定が始まった。いきなりランニングだった。５人はあっという間に他を引きはなし、５人で先頭グループを形成しながら走った。後２キロになったころ、ユージが一人飛び出した。そして、ダントツでゴールした。カイたちは、それにはついて行かず、そのまま自分のペースを保って走り、しばらくしてから同時にゴールした。他はずいぶんしてから、バラバラに入ってきた。みんな、走った後、その辺に苦しそうに寝転がっていたが、ユージたちは平然と笑いながら雑談していた。

そのあと、腹筋・背筋・腕立てを５分間に何回出来るかのテストだった。ユージは最後まで平然とやり続け、カイ達は最後に苦しそうな顔は見せたものの最後まで続けた。
だが、他は全員５分続けることができなかった。そして、柔軟性や反発力のテストが行われた。すべてユージがダントツで、カイ達がそれにつづき、他は散々な結果だった。午前の部が１２時すぎに終わり、５人は固まって昼ごはんを食べた。みんな興奮していた。
「ユージはさすがにダントツだったけど…俺達も頑張ったよな！」

ミンが言った。みんな激しく頷いた。ユージはみんながあまりにも素晴らしかったので、涙が出てきた。それに気がついて、カイがからかった。
「何だ。お前泣いてるのか？本当に、お前よく泣くなぁ。」
「だって、みんな本当にすごかったから…」
すると、マーフィが言った。
「ユージ、泣くのはまだ早いぜ！昼からの剣術と弓術、これがメインだかな。これがうまくいったら、その時こそ泣いてくれ！」
「うん。そうだな。」
と言いながら、ユージは必死で涙をこらえた。

昼からの部は、まず、馬術だった。ユージはかろやかにこなし、他の４人も多少時間はかかったがミスすることなく出来た。後の受験生ははやり、ほとんどがどこかでミスをしていた。そして、弓術だ。ユージは２０本すべての矢を中央にあて、１００点満点だった。カイとマーフィが７５点。ミンとキースが７０点で、他は４０点くらいが多かった。そして、いよいよ、剣術になった。２００点も配点あるため、この点数で合格の是非がほとんど決まる。そのため、受験生全員が緊張し、一言も話さず、会場は緊迫した雰囲気につつまれた。
みんながマスクと防護服を身につけると、順番に名前が呼ばれ、剣が渡される。そうして、１等兵が相手となり組み合いをした。みんな、あっという間にカタをつけられる。
…あれで１等兵なのか。…なるほど。あれなら勝てそうだぞ。
ユージはそう思うと早く自分の番にならないかと思った。
やがてユージたち５人だけが残る。すると、相手が別の１等兵に変わった。みんな少し驚いたが、自分たちが見込まれているから、体力のある兵に変わったのだと思い、逆に闘志を燃やした。ミンが呼ばれた。ものすごい気合いで挑み、迫力のある組み合いを見せた。なんと５分たっても終わらなかった。そこで試験官が合図をしてや

めるように言った。キース、マーフィ、カイが順に呼ばれて、組み合いをする。みな、みんな同じように5分たっても終わらず試験官に言われてやめた。その間、ユージはみんなの様子にハラハラしたり、よし！とガッツポーズをとったり、自分のことのように応援した。

そして、いよいよユージの番となった。注目の一戦を前に、会場の緊張度が増す。相手をする兵がまた変わった。そして、ユージの相手をするらしい兵がコートを脱ぐ。その瞬間、まわりが息をのむ音が聞こえた。

「ユ、ユージ！！あ、あれ、近衛隊だ！！！あの真紅の服は近衛隊の服なんだ！現職の近衛隊が、入隊試験で剣術の相手をするなんて聞いたことがない！うわっ！！！腕に4本の白い線が入っているじゃないか！」

「4本の白い線が入っていたら何なんだ？」

「近衛隊長官の印だ！！！今年の9月に近衛隊長官なったばかりのショーだ！前回のネーチェの全国大会で優勝してる！」

ユージは信じられなかった。マスクと防護服を着て準備を始めた近衛隊を見た。きっとネイルがユージのために用意してくれたのだろう。

…よし…近衛隊長官相手に、どれだけ自分が通用するのか、試してみよう。

ユージは覚悟をきめて、前へ出た。ショーも前に出て来て、ユージの前に立った。二人は向い合って、おじぎをした。

「では、はじめ。」

試験管が合図をした。

二人を身をかがめ、剣を構えた。ユージはマスク越しに、ネイル以上の殺気を感じた。

ユージは武者ぶるいがした。

…さすが、現職の近衛隊長官だ。
３０秒ほどそのままお互い見つめたままっだった。やがて、ショーが動いた。ユージはすばやく反応してよける。ユージは驚いた。
…なんて、動きが早いんだ！
また、二人の睨み合いとなった。今度はユージから挑んだ。すばやくショーがかわす。そこへユージが攻める。ショーが剣を振り払う。ユージは後ろへ飛んで逃げる。ショーがすかさず剣をついてくる。ユージはのけぞってよける。

二人の対戦は5分たっても終わらなかった。全員が二人のあまりの迫力に静まりかえる。
やがて、ショーがユージの足を救おうとしたので、ユージはすかさず、右足でショーを蹴り上げた。ショーが右に体を倒しよける。ユージもバランスをくずし倒れた。すると、ショーは右に体を倒した不安定な姿勢のまま、思いきり腕を伸ばす。ショーの剣がユージの左脇のすぐよこの地面に突き刺さった。ショーも地面に倒れこむ。
試験官の終了の合図が響き渡った。
ショーが立ちあがったので、ユージも立ち上がった。すると、ものすごい拍手が起こった。受験生だけでなく、校長や試験官、他の受験生の相手をした1等兵までが、ユージを見て笑いながら手を叩いていた。ショーがマスクをとった。
「ユージ君。今日、君と対戦出来て楽しかった。」
「私もです。…ですが、近衛隊長官と対戦出来るとは思ってもいませんでした。本当に、貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。」
二人は握手をした。
「ユージ君、来年にある、ネーチェの全国大会に出場してみないか？君が出るなら、私も出ようと思う。また君と対戦したい。」
「そ、それは是非！！！私もまた近衛隊長官と対戦してみたいです。」

「では、また来年に会おう。」
ショーは笑ってユージに手をあげると、校長たちの所へ戻っていった。すると、受験生全員がユージにかけよってきた。ユージはもみくちゃにされた。みんながすごいすごいと目を輝かせて自分を見る。ユージは幸せいっぱいだった。

その後、５人は昨日と同じように、一緒にネイルの館に向かった。試験の結果は１２月１４日の日曜日１０時より学校にて発表との事だった。ユージだけでなく、みんながその日が早く来ないかと思った。
館につくと、広場で訓練をしていたメンバーが走ってやってきて出迎えた。ユージ達がみんな笑顔だったので、うまくいったのだと全員が思った。

その晩の食事は、またごちそうだった。その晩は、ユージとカイは二人で大興奮して、今日の出来事を話した。ショーとの組み合いの話の時には、ネイルもマーサーもセンも食い入るように話しを聞いた。聞き終わると、３人とも、ユージならやってくれると思ったと、そろってユージを自慢し始めた。今回ばかりは、ユージは自分がほめられているのが、まったく恥ずかしくならずに、誇りに思った。その日、二人はカイの部屋で夜遅くまで、話し込んだ。興奮して寝れなかったのだ。

次の日、二人はセンに起こされるまで朝が来たのに気がつかなった。慌てて朝食をすませると厩舎へ行った。８時すぎには、みんながやってきた。熊で怪我をしたフウもやってきた。いつもの森ではなく、町の郊外の森へ行った。

９時にその森へ着くと、それぞれ狩りの練習をした。みんなが近づくだけで動物が逃げていくので、まったく狩りにはならなかった

が、みんな笑顔で何度も挑戦した。石投げの練習もした。これまたさんざんだったか、お互いをけなし合いながら、大笑いでやった。
最後にユージは見本で、弓矢と石投げで、鳥１１匹とうさぎ６匹をしとめた。これは、みんなの分とマーサーへのみやげを渡すためでもあった。
喜びいさんで、ネイルの館に戻ると、すぐに昼食を食べ、訓練を始めた。フウはみんなと同じようにはできないので、時々休憩がてら、マネージャー役をかってでて、訓練のペースを取り仕切った。
最後には、ネーチェの試合をした。かわるがわるみんながよってたかって、ユージと対戦した。さすがのユージもこれだけの人数を何回も相手にすると大変だった。そうして、訓練を終えるとみんあで大騒ぎして風呂に入った。夕食の後は、ユージとカイは図書室で勉強をした。近衛隊の試験に向けての勉強だった。カイがユージに歴史と数学がとにかく大変だと言ったので、ユージはその２教科を中心に勉強をすることにした。

１２話　合格発表

そして、試験の発表の１２月１４日がやってきた。
ユージとカイは落ち着かず、９時半には学校についた。ミンとキース、マーフィも、もう学校にいた。５人は固まって、大丈夫かな～、と口ぐちに言った。けれども、５人とも兵士にはなれるに違いないと確信していた。不安はまったくなかった。

１０時前に、校長がまるめた紙を持ってやってきた。そして、それを掲示板にはる。そこには合格者の名前と点数と等級、それに配属先まで書いてあった。

合格者

★１位　ユージ　実技５００　筆記４３８　合計９３８　１等兵
配属先　エルパ隊
並びにエルパ町訓練学校講師
２位　カイ　実技３９２　筆記５００　合計８９２　１等兵　配
属先エルパ隊
並びにエルパ町訓練学校講師
３位　キース　実技３７２　筆記４１７　合計７８９　１等兵
配属先ミュール隊
並びにミュール町訓練学校講師
４位　ミン　実技３６９　筆記４０８　合計７７７　１等兵　配
属先センバー
並びにセンバー町訓練学校講師
５位　マーフィ　実技３６６　筆記　４１０合計　７７６　１等兵
配属先シーナ隊

並びにシーナ町訓練学校講師

＊＊＊＊＊＊

６位　カナ　合計６４３点　４等兵　　７位　ヤーナ　合計６３９点　４等兵

８位　ロック　合計６２７点　５等兵　　９位　ランディ　合計６１６点　５等兵

上記４名エルパ隊

それを見て、ユージたちは大声をあげた。

「みんな１等兵だ！！！」

「やったぞ！！」

みんな肩を抱き合って喜んだ。すると、カイが言った。

「ユージ、お前、名前の前にある星を見ろ！あれは首席のマークだ！」

驚いてユージはもう一度合格者の発表を見た。

ほんとだ。星のマークがついていた。

ユージは目がうるんできた。また、みんなにからかわれると思った。でも、ユージを誰もからかったりしなかった。みんなの目もうるんでいた。

やがて、合格者と筆記試験優秀者だけが残った。

筆記試験優秀者が、校長より合格証が渡される。彼らは、金一封も貰っていた。次に、５等兵の二人、４等兵の二人が合格証が渡された。その顔を見て、ユージは驚いた。後からネイルの館に来ていた青年たちだった。

そしてユージたちの番だ。５位のマーフィから順だった。そうして最後にユージが呼ばれた。

「ユージ君、おめでとう。見ての通り君は首席で合格です。９３８

点という数字は歴代４位の点数です。しかも、実技において満点というのは、記録に残る限りでアイカ国はじまって以来の点数です。ええ、もちろん入隊試験だけでなく、一般兵士の更新試験でも誰一人出してはおらぬのです。さすがに、近衛隊が受ければ満点はとれるかもしれませんが、彼らが一般試験を受けることはありませんからね。」

ユージは驚いた。

「ほ、本当ですか…」

「はい。」

ユージは自分の目がまたじんわり潤むのを感じた。涙が出そうになるのを必死でこらえた。

「それから、カイ。君は次席です。彼がいなければ、君が首席でした。」

カイは、小さくガッツポーズをして喜んぶ。

「それから、3~ 5位もそこの3名です。」

校長がミン、キース、マーフィを見て言った。

「つまり、ここに今回のアイカ国軍入隊試験合格者３６９人中、１位から5位がそろっているというわけです。」

全員が驚いてお互いをみた。

「しかも、君たち全員、今回がはじめての試験ですね。訓練生がいきなり1等兵になることはほとんどありません。本当によく頑張りました。よって、ユージ、カイ、ミン、キース、マーフィ。5名は、特別に王から表彰されることとなりました。追って、王より詳細の手紙が届くはずです。」

そして、校長はまた賞状を手にする。

「校長の私からも、この5名に特別に表彰をにしたいと思います。」

ユージはあわてて、

「私は、この学校には通っておりません！いただけません。」

とユージが言った。すると校長はにこやかに笑って言った。

「何をおっしゃいます。ユージ君、あなたがネイル様の館でこの者

たちを教えてくださらなかったら、全員落ちていたかもいれないのですよ。十分、表彰に値します。」
「ユージ。その通りだ。お前がいたから、みんなここまでやれたんだ。表彰されよう。」
カイが肩をたたいて言った。ユージはカイを見て頷いた。校長からみなに表彰状が渡された。その場の全員がユージたちを祝福した。
「合格者には、入隊式の詳細を追って知らせます。では、これにて合格発表を終わります。」
校長が部屋から出て行った。

５人は急いで馬を走らせて、ネイルの館へ行った。ジェッシーやスコットやフウやその他のメンバーが門の外で、ユージたちが帰ってくるのをまっていた。
「全員１等兵だ！しかも上位５位独占だ！ユージが首席で、カイが次席。なんと、全員校長に表彰されたうえ、王にも表彰されることになった！」
カイが喜び勇んで言った。
みんながそれを聞いて、目をぱっと輝かせお互いに抱き合って喜んだ。その騒ぎを聞きつけて、ネイル達が家から出てきた。ネイルもセンも気になって今日は畑にいかず、ユージたちを待っていたのだ。そして、カイが結果をネイルたちに報告すると、全員が涙をためて、ユージたちに、おめでとうと言った。ミンとキースとマーフィは、両親に報告したいからとすぐ帰っていった。他のみんなも、いったん帰って昼を食べてからまた来るといって帰った。

ユージとカイは部屋に行き、ベッドに寝転びながら、合格証と成績表をじっくり見ていた。
「おお！俺、剣術で１４５点もとってるぞ！剣術は１００点をとるのが難しいんだ。体力測定９５点か。ユージがいなかったら、体力測定は１００点だったに違いない！」

「カイ、俺、数学６３点も取れてる！！！」
「な、数学ってコツコツやってたら、ある日急に伸びるんだ。」
「うん。なんだか、数学、好きになった。」
「こうなったら、次の近衛隊の試験受けるぞ！」
「そうだな。」
ユージもすっかり気分をよくして答えた。
「近衛隊ってさ、みんな優秀だから、みんなが地理と地学と医学の３教科はほとんど満点とっちゃうんだ。まぁ、一般兵士試験に毛がはえたような問題しか出せないからなんだが。でさ、それじゃあ選抜できないから、歴史と数学で恐ろしく難しい問題を出してくるんだ。だから、配点も違う。同じ５００点満点だけど、歴史と数学は１５０点満点、地理が１００点で地学と医学が５０点づつ。だから、数学が得意になるとかなり有利になる。次の試験といったけど、最低１年は一般兵をしなくてはいけないから、次俺たちが受けられるのは再来年の８月だ。それまで１年と８か月、死に物狂いで勉強だ。まぁ、ちょっとユージには短い気もするが…それに、まさか訓練学校の講師になるとは思わなかったからなぁ。かなり時間の拘束をうけちまう。さすがの俺もちょっと不安だ。」
「まぁ、次は無理かもしれないけど、合格できるように最善の努力をすることにしよう。」
「ああ。」
そう話しているうちに、マーサーが昼ごはんができたと呼びにきた。昼ごはんを食べたら、すぐに広場にいって、ランニングしながらみんなを待った。
やがて、みんながやってきた。それに大人も一緒にやってきた。キース、マーフィ、ミンの両親だった。
「ユージさん、本当にありがとう。何とお礼をいったらいいか。まさか、息子が１回目の入隊試験で合格するとは。しかも、１等兵で、さらに王からの表彰を受けるとは…夢にも思わなった。いや、本当に何度お礼をいっても足りない。」

と口ぐちにユージにお礼を言った。
「いえ、みんなが頑張ったからです。」
と言ったが、誰もユージの話は聞いておらず、泣きながらユージにお礼を言うだけだった。

３人の親が帰ってから、ユージは人数が増えているのに気がついた。
「あれ、見たことない顔がいるな。」
カイが答えた。
「ああ、新メンバーさ。１４名いる。まぁ、俺たち５名はいなくなるからな。こいつらの訓練は、ジェッシーたちに任せようと思っている。」
確かに、ユージたち以外の最初のメンバーも驚くほど上達した。きっとみんな次の試験で合格できるだろう。ユージは人に教えることで自分も上達できたと思った。だから、ユージの変わりに彼らが教えるのは、彼らにもいいことだと思った。
昼からの訓練は、ユージたち５名だけで別に訓練した。ユージたちはすべてにおいてお互い競争した。どんどん的から離れてどれだけ当てれるかを競争したり、試験の時と同じように、体力測定をやったりした。

次の日はものすごく忙しかった。午前中はエルパ市の市長の表彰を受け、昼食を招待された。昼からは、ユージとカイ、それに４等・５等に合格した他の４名と一緒に、学校で訓練している兵士に新入隊員として、挨拶をしにいった。

その夜、ユージとカイに手紙が届いた。現国王ザイールからで、表彰式の招待状だった。次の日曜日の１１時から表彰式と書いてあった。せっかく首都ペネまで行くのだから早めに行って、観光しようとこうことになった。キース、マーフィ、ミンにそれを伝えると

彼らも大賛成した。

５人は、みんなに見送られ１７日の朝に首都ペネへ向かった。その日は宿に一泊した。

その晩に、ペネでは、カイが家でみんなの世話すると言いだしたので、ユージは顔面蒼白になった。

「だからぁ、王といっても、普通のおっさんだよ。家だって、ネイル様の家とほどんと変わらない。王は、宮殿には住んでいないんだ。王宮の敷地内にある普通の家に住んでる。俺も小さい頃はそこに住んでた。宮殿はこの国では飾りだ。式典をおこなったり、他国から客を招くときに使用するだけだ。ああ、近衛隊の連中は、宮殿で結婚式をあげたりするな。」

すると、マーフィが言った。

「俺達だって、やっぱり王の家に世話になるなんて、緊張するよ。ユージはまだネイル様の屋敷にいたんだから、マシじゃないのか？」

「何言ってんだ！リート国じゃな、王なんて、雲の上のはるかかなたの、神様みたいな存在なんだ！いくらこの国に階級がないっていったって、俺には考えただけでも恐ろしい。ネイル様が元国王だったって聞いた時どれだけ恐ろしかったか。カイだって、こいつが王子だってしって、どれだけ恐ろしいと思ったか！！！！」

それを聞くとみんなが大笑いした。

「まぁ、さすがにそこまで俺達は怖くないかな。」

ミンが言った。キースとマーフィもうなずいた。

「とにかく、もうオフクロには手紙を出しておいたから、断れないからそのつもりでいろ。」

ユージはしぶしぶ承知した。そんなユージの姿を見てカイがため息をついた。

「…いっとくけど、表彰式は立派な式典だから、当然宮殿で行われるからな。覚悟しとけよ。」

「ええ！そうなのか？」

ユージが飛び上がった。
「当たり前だろ！王からの招待だぞ！宮殿以外のどこでやるってんだ。」
ユージはめまいがした。
「はぁ…そんなことになるなんて…」
そんなユージにみんながまた大笑いした。
「ところでさぁ、ネイル様やセンさんが、あの年でまだあんなにお強いって事は、ザイール様やヤンネ様も、さぞかしお強いんだろうなぁ。」
ユージが何気に聞いた。
「オヤジは王になってすぐに腰を痛めたから、激しい運動が出来なくなったんだ。ヤンネ様もそんなオヤジに遠慮して、あんまり運動してない。…俺が小さい頃は、ヤンネ様、俺にだけは相手、してくれてたけどな。」
カイが寂しそうに答えた。
「そうなのか…」
ユージはなんて言っていいか分からなかった。
「気にするな。俺には最高のオヤジだから。」
カイが笑ってそう言ったのでユージはほっとした。
「そりゃ、自分の父親が王様なら、さぞかし自慢だろうな。」
キースが言った。
「そうさ！本当に、あんなオヤジを持てて俺は幸せだ。」
ユージはカイがそんな風に自慢するザイールはどんな人なんだろうと思った。早く会ってみたいと思った。

次の日、宿で朝をゆっくりすごしてから、９時すぎに出発した。首都ペネには、１４時くらいについた。遅い昼食を食べ、王宮に向かった。王宮が近づくとユージがそわそわしだしたので、みんなおかしくて笑った。王宮の前は広場になっていた。沢山の市民がそこに集い話をしたり、子供たちが遊びまわっていた。広場を通って、

門の前にやってくると、1等兵が何人か警備をしていた。カイが門の外にいた1等兵に何かを見せると、1等兵が笑って、「王宮へようこそ。」と挨拶してくれた。
ユージ達は門の中に入ると、中にいた門番の1等兵に、入ってすぐ左の小屋で待つように言われた。一人の一等兵が馬に乗ってどこかへ行く。しばらくするとその一等兵が近衛隊とともにやってきた。
近衛隊長官のショーだった。
「やあ、君たち、久しぶり！王宮へようこそ！無事アイカ国軍入隊試験に合格おめでとう。」
「ありがとうございます！」
ユージたちは慌てて立ち上がりそう言うと、頭を下げて挨拶をした。
「ユージ君、実技で満点だったと聞いたときは本当に驚いた。しかも、歴代4位の成績で首席だとはな。その上、カイ君達も1回目の試験で1等兵に合格したうえに上位を独占したと聞いて、開いた口がふさがらなかった。私も式典には参加するが、その時にはあまり話せんからな。今日は無理やり都合をつけて、君たちのお伴にかってでたというわけだ。カイ君がいるから必要はないとは思ったんだが。」
「本当に自分でもいまだに信じられません。しかし、私だけでは到底そのような素晴らしい成績をとることは不可能でした。ここにいる仲間がいたからこそ、頑張れたんだと思います。」
ユージがみんなを見て言った。
「そうだな。一人じゃ無理だったな。」
カイが笑って言うとキースとミンとマーフィも笑顔で頷く。
「そうだ。仲間はとても大事だ。これからも、みなお互いを大事にするがよい。」
みんな元気に、「はい！」と答えた。
「君たちは、16歳という若さでトップの成績で入隊試験に合格した。つまり、この国のエリート候補生というわけだ。これから、ぜ

ひ、近衛隊を目指して頑張ってくれたまえ。かなり大変だが、私が近衛隊にいる間に来て欲しいね。」
ショーは笑ってそう言った。ユージ達はうれしさで顔から笑顔がこぼれる。
「では、ザイール様の家まで案内しよう。」
ショーは宮殿の敷地内を案内しながら進んだ。カイも時々説明してくれた。王宮の中は森のように木々が生い茂っていた。
…リート国の王宮とはまた全然違うな…なんだか住みやすそうだ。
リート国の王宮は、木々はほとんどなく、整備された森があるだけだった。
少し歩くと、すぐ近くに宮殿がそびえたち現われたので、あまりの大きさと豪華さに、みんな口を開けて見上げた。
やがて、近衛隊舎監へつく。前の広場でたくましい近衛隊が数名訓練をしていた。ユージたちは、あこがれの人たちを間の前に大興奮した。いつか本当にここで働く日が来るのだろうか。そうなりたい。と全員がそう強く思った。
そして、王の家についた。カイの言っていたように、ネイル様の屋敷より少し大きいくらいの家だった。ユージはそれを見て、ほっとした。
ショーが式典で会おう、とみんなに言った後、さっそうと馬にまたがり去って行く。
その姿があまりにもかっこよくて、ユージ達はショーが見えなくなるまで、ずっとショーを見ていた。

カイが玄関にあるベルのうち小さい方を鳴らした。
すると、やさしそうな女性が家の中から現れた。
「まぁ、カイお帰りなさい。試験合格おめでとう！本当に鼻が高いわ！」
そういって、カイを抱きしめた。カイは恥ずかしそうにして、
「母上、もういいでしょう？離してくださいよ。」

と言った。そうやっていると、また別のからいらしい女性が玄関を開けて出てきた。
「お兄様！お帰りなさい！本当におめでとう！」
とまたまた抱きついてきた。今度はカイは嫌がらず、カイもその女性を抱きしめた。
「マユ、久しぶり。ありがとう。また綺麗になったな。」
「カイ、お前、妹がいたのか！」
ユージは驚いて言った。
「ああ、そうだ。あれ？言ってなかったっけ？」
「聞いてない！」
二人のやりとりを聞くと、マユはカイからはなれて、ユージたちの方に向き直った。カイがみんなに向かって、
「こちらが、俺の母、レノだ。そして、こっちは妹のマユ。」
「みなさん、ようこそお越しくださいました。みなさんが来るのを知ってから、首を長くして待ってましたのよ。今回は本当に素晴らしい成績での合格おめでとうございます。式典が終えるまで、どうぞごゆっくりなさってください。」
とレノがにこやかにあいさつした。
「みなさま、カイの妹マユです。はじめまして。このたびは、本当におめでとうございます。」
マユがかわいらしく言った。まだ幼い顔をしていた。
「で、母上、マユ。順番に、ミン、マーフィ、キース。」
カイが自分たちの名前を言ったとき、一人一人、丁寧にお辞儀をした。
「そして注目の男、ユージだ。」
ユージはそれを聞いて、ずっこけた。
「な、なんだ、その紹介の仕方は！」
そう言ってしまってから、しまったと思った。あわてて、
「す、すみません。ユージです。よろしくお願いいたします。」
と言い、お辞儀をした。すると、レノが笑いながら言った。

「ええ、確かにあなたは、この国全員の注目の的ね。」
「ええ？国全員？」
ユージは目を向いた。するとカイが言った。
「当たり前だろ！この国始まって以来、初めて実技試験で満点をたたきだした男だぞ！さっき近衛隊舎監に寄ったときだって、みんなショー近衛隊長官とともにいる、われわれ5名のうち、実技試験で満点を出したのはどいつだ、って興味津々で見てたに違いない。オヤジだってその男の顔が見たくって、わざわざ式典に呼んだんだ。俺達はそのオマケさ。」
「そ、そうだったのか…」
ユージは青ざめた。
「ま、とにかく。これで、お前は俺の母には、普通に接することができたってわけだ。俺に礼を言え。」
ユージはびっくりしてカイを見た。
「そ、そんな事言うなよ。」
ユージは、ちらっと、レノを見ながら小声で言った。レノが不思議そうな顔でユージを見る。
「あのさ、こいつ、王様や王妃様の家に泊まるって聞いて、そりゃもうびびって。家に来るの、嫌がってたんです。」
レノは大笑いした。
「王妃なんて、本当に名前だけなんだから、そんなに固くならないでね。ただのカイの母親だと思って頂戴な。」
「は、はい。」
ユージは恐縮して答えた。でも、カイが言っていたように、レノもマユも、本当に普通の家庭の家族に見えた。王はともかく、彼女たちには、なんとかやっていけそうだ、と思った。
「じゃあ、お部屋に案内するわね。お疲れでしょう？」
ユージたちはみんな一緒の部屋だった。カイがみんなと一緒がいいと言ったので、会議室をみんなの部屋にしたと言った。だから、

今日は王たち重役は宮殿で会議をしているのだと言った。
体が冷えていたので、すぐみんなで風呂に入って温まった。ここも温泉だった。風呂からあがると、また部屋に戻って夕食まで、しゃべり倒した。
「あのな、お前ら、妹のマユには気をつけろ。」
「何を気をつけるんだ？」
キースが聞いた。
「あいつさ、『私、強くてカッコイイ男が好きなの！』って、いつも叫んでてさ。」
カイがマユのマネをして言った。
「だから、お前ら、その強くてカッコイイ男だから、絶対マユが気に入るに違いない。とうか、すでに気に入ってるかもしれん。ま、もっとも、マユはちょっと当てはまる男がいると、キャーキャー騒いでいるからな。たぶん、近衛隊全員がマユの理想の男だな。だから、あんまり気にすることもないけど。それに、今一番夢中になってるのは、ショー近衛隊長官だしな。」
ユージたちは、確かにショーに、カイの妹が騒ぐのは無理もないと思った。前の試験でもカッコイイと思っていたが、みんな、今日ですっかりファンになってしまっていた。

やがて、夕食の時間となった。王のザイールはまだ帰ってきていなかった。ユージはほっとした。夕食はネイル様のところとあまり変わらなかった。本当に王妃も同じ食事なんだ、とユージは思った。旅の疲れと昨晩遅くまで起きていたので、この日はみんな早めに眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8283v/

真紅の王冠

2011年10月3日03時39分発行